

象牙鹿刻法

乾



石 准  
繩 方

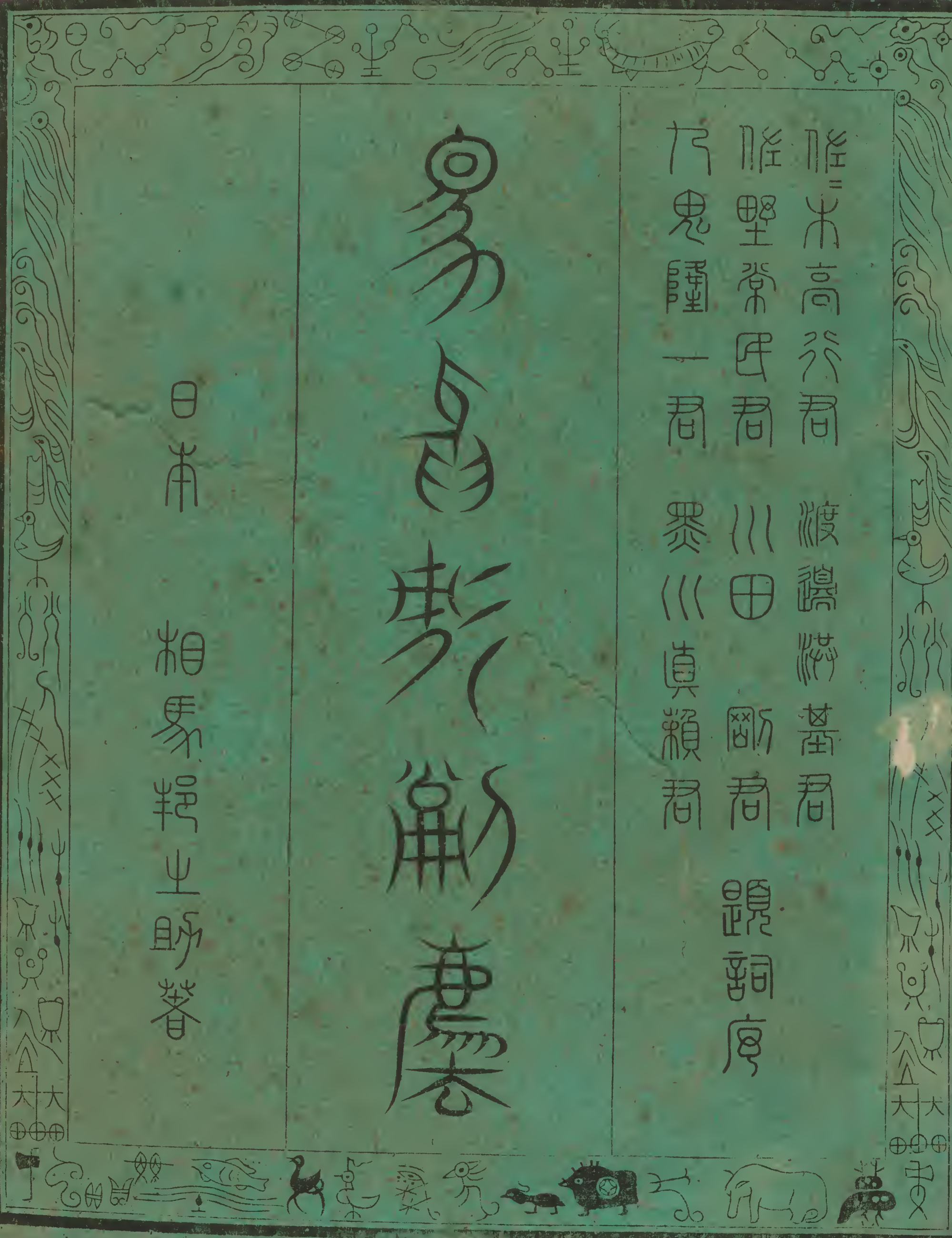


易 象 新 編

性木高行君 渡邊滿基君  
性堅常氏君 川田 剛君 覬詞序  
乃鬼陸一君 畠川貞賴君

日本

相馬艸生所著





觀矩  
高



高林 藏書

象牙彫刻法序



我邦繪畫周刻之術自古師授相承具有其法但未有筆之於書者夫口傳而手受之受者或遺之傳者或不悉固不如書之可據也頃者相馬仙齡著象牙彫刻法



以便初學。牙刻之行於諸美。漸為  
最新。今其出先成。木石五金。繪畫  
蕭繡之書。將續之而出。仙翁以著。  
蓋為之先驅矣。若夫手精腕熟。  
縱然自在。遊于法之外。則所謂默識  
心會者。非文字之所能傳也。修美

術者。宜求法於有形。而得神於無  
形矣。仙翁乞序。因出與之。

明治己丑臘月。雪津漁叟題於  
靜觀居之南軒。





大森惟中書



序



象箸見史記。象掃見毛詩。象  
尊象卽象路見周官。又徵之  
我國典。白牙尺。綠牙撥。鏤尺。  
紅牙撥。鏤尺。紅牙撥。鏤竿子。  
見東大寺獻物帳。五位以上  
用牙笏。見大寶衣服令。三位



以上腰帶及內命婦櫛。聽用象牙。見延喜彈正式。而今正倉院寶庫所藏。牙尺及鍼筒。皆華帽。法隆寺牙尺及鍼筒。皆千餘年外物。則古人既已善治骨角。近世有一齋奉真正。直印齋周山形山等。巧刻人

物花卉鳥獸蟲魚之狀。殆為良工。山陽遺稿象墜記。足以見其一斑矣。陸奧人相馬君仙齡。夙工此技。近著一書。自寫形着色。以迄刀鋸鉅鑿諸術。逐次論說。插以畚画。名曰象牙彫刻法。就余七序文。余



嘗讀爾雅。象謂之鵠。角謂之  
觥。骨謂之切。象謂之磋。蓋亦  
當時之彫刻法。然今攷工記  
殘闕。其詳不可得而知。近世  
良工能辨於手。不辨於筆。而  
君則手與筆兩辨之。使人一  
目瞭然。有所自得焉。故余嘉

斯舉。總通上梓。弁一言於卷  
首云。上章攝提格如月。文學  
博士川田剛撰并書





序



凡百藝術自脫草昧之域以上  
皆有典型而典型之立漸次  
長進積數百年之工夫而成  
後人更加意匠致精累巧



其進無有窮極此所以貴  
於煉磨也本邦彫刻之術  
既長機巧又饒雅致其所  
製出中外珍之久矣但其術  
師弟相授口傳手受無有成

書東京彫工會員相馬邦之介君  
當今之志和也常憂之頃叩  
其蘊奧筆之于書以為授業  
之範名曰象牙彫刻法蓋欲  
益精其術以揚國華焉余







らけと近や世にふねへこゝろち  
に成りしりこゝに島みよを村へ  
つくほこゝにあゝこゝにふくし累國  
なり相馬ぬこゝのわよこゝにふねへ  
こゝにちりふのこゝにふねへ利はと  
いふ、美を山とてあゝの書にふねへ

夏とふれあけ書とこゝにふねへ  
しりあけぬこゝにふねへ  
ちりうにこゝにふねへ  
はるちりあけぬこゝにふねへ  
ちあけぬこゝにふねへ  
きあけぬこゝにふねへ



夢にのりていふも、夢のたぐひ  
夢のいふも、夢のいふも、夢のいふも  
も天のうにひる人のあまゝい  
ふうそくをいふも、夢のいふも

明治廿二年二月 文芸部より川島



録大夢禪師  
題彫刻法

山はくまの

山はくまの



松もとわらうて

つるも

花乃ある

うは

成あ



彫刻所國産六

自叙

去ル明治十五年、門生ヲ養ヒ、是レニ彫刻ノ道ヲ授ケント欲ス、種々方法ヲ求メテ、學ビ易カラントヲ試ムト雖モ、其適切ナル方法ヲ得ル能ハス、畢竟學力資財ノ及ハザルガ爲メニ、良方法ヲ得ル能ハザル者也、同十九年、門生ヲ辞讓シテ、自ラ單身トナリ、専ラ彫刻上ノ方法手段ヲ明カニシテ、後日ノ便ヲ得ントヲ計リ、孜々惜ラス工業ノ傍ラ、製作時間先後ニ必ス其形ヲ認メ、截リ碎方ノ未タ精密ナラザルモ、圖ヲ編シテ初學ノ階梯トナサント欲ス、而シテ其間ニ亦見聞ト諸書ニ雜出スル趣旨等ヲ得テ、之レニ圖画ト私見ヲ以テ稍修正ヲ加ヘ、彫刻上ニ適用センコトヲ以テセリ、故ニ解説ノ如キハ俗語アリ、畧語アリ、皆錯雜シテ章句ヲ成サバルベシ、看者之レヲ恕シテ、只其意ノアル所ヲ察セバ、余ガ幸福之レニ過キタルナシ、其編輯ノ次第ハ、先ツ起因目的及ヒ麓落道具ヨリ工場迄ヲ初メニ列シ、次キニハ、第一避俗愛銳ヨリ、第九蚋蜂逃生ノ間、余ガ心中象形ノ思想ヲ起スヲ主眼トナシ、故ニ規矩繩墨ヲ以テ是非善惡ヲ責メス、只道具及ヒ小刀等ノ使用ヲ練熟セシコトヲ務メ、漸ク運刀ノ進歩ヲ看ルニ及ンデ、名画良刻ノ諸品ヲ鑑ミ、精粹



ノ端ニ趣クヲ得タリ、亦ニ編ノ顔面、手足部ニ於テ、由申甲田等、ノ十字面貌  
及ビ手足ノ正斜仰伏等、ノ形狀ヲ象リテ、全体ヲ作ルヲ學ブ、第十五處女  
閑適ヲ彫刻スルニ當テ、大ヒニ悟ル所アリ、茫然削剥ノ一技ニ老ユルモ、到  
底妙想至感ノ体ヲ表ハシニ、標目ナク、是ニ於テ、畢生ノ腦力ヲ此學ニ浮ベ、  
全身ノ腕力ヲ此術ニ注ギ、萬有ノ彫刻物ニ向テ、眞想形ノ排列ヲ設ケ、自己  
が行路ヲ定メ、修業ノ順序ニ惑ハザランヲ期ス、古人明カニ説ヲ爲サス  
ト雖、氏不識ノ間ニ彫刻セシ物体ハ、自ラ眞想形ニ影彩ヲ備フル者ニ  
シテ、其證ヲ舉レハ、希臘古代ノ彫刻品ハ、多ク裸体ヲ以テ、眞ニ迫ラシメ、印  
度ノ佛像ハ、不動尊魔鬼等ノ如ク、想像ヨリ出テ、人ヲ感動セシム、我邦、鴨  
川人形、奈良人形、及ビ飛彈彫等ノ如キハ、形狀簡畧ニシテ、尤モ清觀ヲ表ハ  
ス、尚其妙想ト云フベキ一体ハ、彼十二天ノ如キ者ヲ云フ、是レ眞想形ノ体  
ヲ發見シタル所以ナリ、若夫是レヲ標本トシテ、旅行セハ、五里復五里ノ遠  
キヲ知レ、氏岐路ニ躊躇スル憂ヒナシトスルニ、庶幾ラント、門生童蒙ノ爲  
メニ、上梓シテ聊カ述ブルヲ云爾、

于時明治二十二年七月孟夏

陸相邦謹誌

凡例

一 此書ハ、專ラ象牙彫刻上ニ関スル方法ヲ掲ク、故ニ象牙彫刻法ト名稱  
ヲ附シタル者也、書中一二ノ号ヲ附セル設題數ハ、二十二ニシテ、其變  
圖ハ、木地形ヲ除ヒテ、上底、前後、左右、都合八十一アリ、別ケテ乾坤ノ二  
編トス、三編四編ハ、他ノ實業者カ經驗シタル、圖画ヲ掲載スヘシ、  
一 設題ノ下ハ、元物ノ重量、寸法、製作ノ日月ヲ記載セリ、重量ハ、木地ノ時  
價ヲ計テ時々比較スルヲ得セシム、寸法ハ、初學ノ子弟ヲ教育セシム  
ルニ、假リニ、木材ヲ以テ象牙木地ノ形ヲ削表セシムルヲ務ム、製作ノ  
日月ハ、一題号ヨリ二迄ノ間ヲ推算シテ、一個凡ソ幾日ヲ費シテ製ス  
ルヤ、粗密ノ差アリト雖、氏大畧ノ日限ヲ期センヲ慮リ、  
一 此書起稿ノ考按秩序ハ、日本美術協會、鑑畫會、東京彫工會、等ニ於テ、見  
聞ヲ擴メ、思想ヲ養ヒタル者也、然レ、氏短才疎能ニシテ、克ク各會意ノ  
アル所ニ進ムヲ能ハス、且書中ノ文章、圖画、筆耕共ニ各専門家ニ依頼  
セシメテ、余一己ノ手ニ編述シタレハ、誤字差意アルヲ免カレス、看者  
夫レ之レヲ恕セヨ焉、



○目錄乾

彫刻起因及目的	一避俗愛鈍 <small>参考圖</small>	主心忙兩避
鹿落道具鋸諸類	二主美弃醜	主左右愛憐
雁木 併鑢十形	三牧童思婦	主舞踏演習
小刀燒方	四育兒嬉戲	主處女閑適
木竹小刀十三形	五勿侮長者	○真想形
象牙骨角刀廿四形	六猫兒失母	主戲花蛺蝶 <small>真</small>
金屬刀	七婦容可愛	主威伏靈蟲 <small>想</small>
比例線解	八新婦愛兒	主慈悲善惡 <small>形</small>
比例尺解	九納蜂逃生 <small>参考圖</small>	主二女讀書
人体割合	○二編坤	主抱子剥果
衣服	應用推理佛像	主前題再試
象牙	顔面手足全体	主美人贈花 <small>右説明</small>
題意	十姊妹待賓 <small>截碎十着 面貌八圖</small>	○終目錄終
工場	土稚兒慕乳	

象牙彫刻法乾

彫刻起因及彫刻者目的

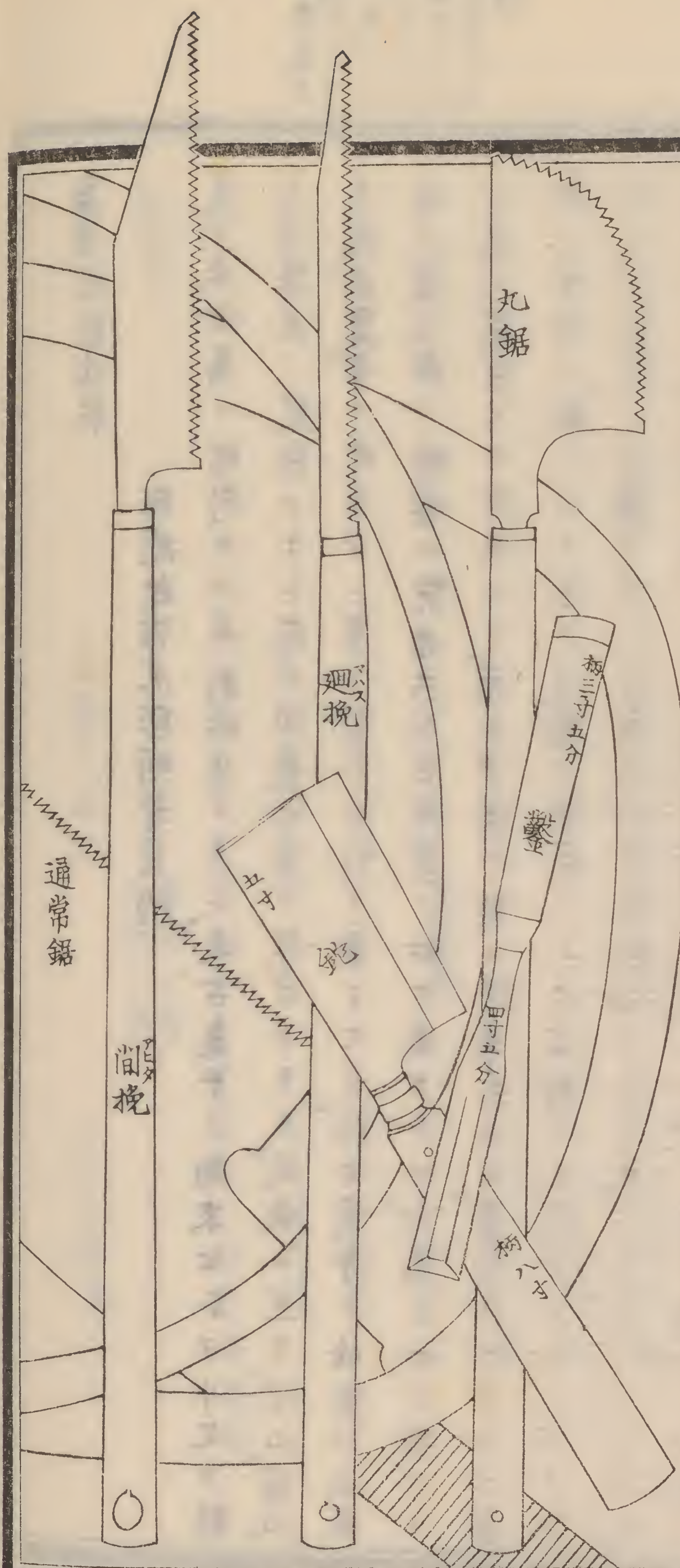
夫レ本金屬ノ彫刻タル其創始甚々古シ、近古象牙ノ舶來セシヨリ之ヲ刻シテ器具ノ裝飾トナシ或ハ印籠烟袋ノ根付トナス、近世ニ至リ彫山、岡山、友親、法實等ノ徒出テ、專ラ象牙彫刻ヲ業トセリ、抑モ象牙ノ性質ハ本金屬ノ間ニ在テ精密ニ製作スルモ本質ノ如ク脆カラス、金屬ノ如ク堅カラズ、是レ貴重スル所以ナリ、而シテ此ノ術ニ從事スルニ營利ヲ主トシテ伎倆ノ如何ヲ觀ミサル者アリ、尙シ營利ノミヲ目的トシ、汲々トシテ刀ヲ把ラハ、其技或ハ老熟ニ至ルト虫尸、到底其鄙俗ナルヲ免レス、之ニ反シテ技術ヲ精研シ、名譽ヲ墜サ、ラン一ヲ務メハ、或ハ一時ノ利ヲ攫取スル能ハスト虫尸、他日必ス高妙ノ域ニ到ラサルヲ莫ルヘシ、白樂天ノ詩ニ云ク、人各有偏好、物能莫兩全、ト豈贏利ヲ愛セサランヤ、品位ヲ尚フノ樂キニ如カス、學者必ス目前ノ贏利ニ迷フヲナク、能ク其本末ヲ辨シテ意匠ヲ定メ、一鑿一刀ヲ施シテ苟モセスンハ、蝶蛾ノ窩ヲ脱スルカ如ク、粗穢ノ体ヲ變シテ、其觀ヲ美ニシ、其術隨テ進達スルヲ蓋シ疑ヲ容レサルナリ、

彫山有盧生  
夢園周山有  
列仙龍神等  
國友觀有孔  
聖觀敬聖國  
法實有笑哭  
怒園



アヲ オトシ  
鹿落道具鋸諸類

凡テ彫刻ノ鹿落シハ鋸又ハ鑿鉋等ヲ用ユル者ナリ、偕其象牙挽ノ鋸ハソ  
ノ目ノ形三角ニシテ、即チ之ヲ劍目ト称ヘ、総テノ堅質物体ヲ挽割ルニ用  
ヒ、倘シ一邊平ニシテ一邊斜ナル片ハ、挽障リ鈍ク、及テ切斷スルヲ遅ス、左  
ニ図シタル鋸ハ、及形ノ兩様ヲ示セル者ナレハ、實際彫刻スヘキ物体ニ臨  
テ、ソノ銳利遲鈍ヲ試ムヘシ、



釣掛平挽

棟除  
柄四寸

釣掛廻挽

柄六寸

柄六寸

乾



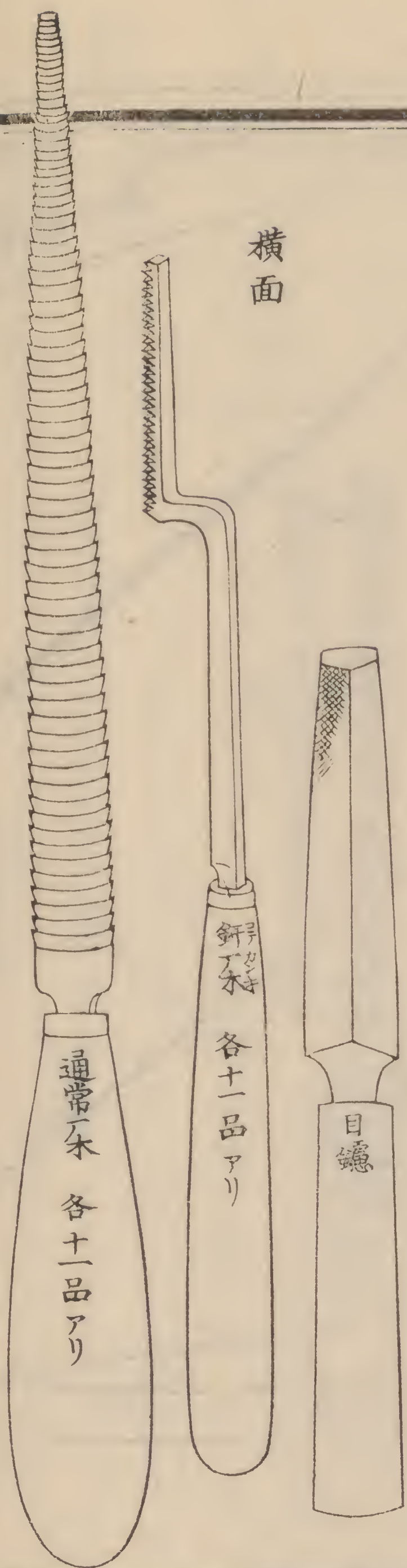
形十一 并鑿水

丁水鑿ハ畧ソノ用ヲ同フシテ金屬物ニハ專ラ鑿ヲ用ユ牙角物ニハ丁水ヲ專ラ用ユル者ナレ正或ハ牙角ノ仕上等ニ鑿ヲ用ユルアリ菱形ノ鑿ハ唯鋸目ヲ截ルニ用ユルヲ以テ之レヲ目鑿ト稱ヘ兩様共ニ大小ハ適意ニ考フヘシ大抵殊ノ十一形ヲ以テ要用ヲ便セリ

截面

- 桃形
- △月形
- 圓形
- ◇菱形
- 角
- △三角
- ▽截込
- △袴
- 平
- ▽鱗
- 棗

横面



小刀ノ焼方

小刀ニ用ユル下鋼ハ間鋤ト稱ヘテ鑿ノ如キ者商家ニ於テ販賣セリ近世舶来鉄渡テ其類數種ニ分レリ精密ニ鍛鍊セスヲ第一号鋼トス鑿等ニ宜ク次ハ第二号鋼トテ金石等ニ適ス其次ハ第三号鋼ニシテ牙角木竹及广木等ニ用ユルニ宜シ又其次ハ第四号鋼トテ機械的ノ應用ヲナシ而シテ此ノ小刀ヲ焼クヤ消炭ノ火中ニ容レ火色ト同キヲ度トシテ調合水ニ投ス若シ火色ヲ過キテ白色トナル片ハ炭酸質ヲ失ヒ忽チ脆性トナレリ故ニ克ク心ヲ用ヒ水中ニ在テ緑タル小刀ヲ出シ再ヒ火上ニ置キ金屬ハ琥珀色トス木竹牙角ハ琥珀色ヲ變シテ碧色ニ至ラサルヲ妙トス或ハ之レヲ燒ク人ニ依テ種々ソノ方法ヲ異ニス先ツ火中ヨリ出シヤ否油ニ容ルハアリ又湯ニ入レ或ハ味噌ニ指込ムアリ如斯簡單ナル方法ヲ心得テ以テ實際ニ試ム片ハソノ味ノ妙ナルハ自ラ擇フヲ得ルニ至ルヘシ

木竹小刀十三形併手付

木竹彫ノ小刀ハ尤モ鋸ク礪キ截味ヲ試ミ後本物ニ臨マサレハ形ヲ彫出ス自由ナラス形ヲ彫出ス自由ナラサレハ刀痕自ラ鋸ク人ノ鋸ク工

玉裏曰夫賢者國家之器用也所任賢則趨舍省而功施普君用利則用力少而成就衆故工入之用鈍器也勞筋苦骨終日治石及至巧治鑽干將之巧鑽水淬其鋒越斂其鋒水犀草忽若記繩公輸若墨繩公輸若墨錐崇臺五層延袤百丈而相得也

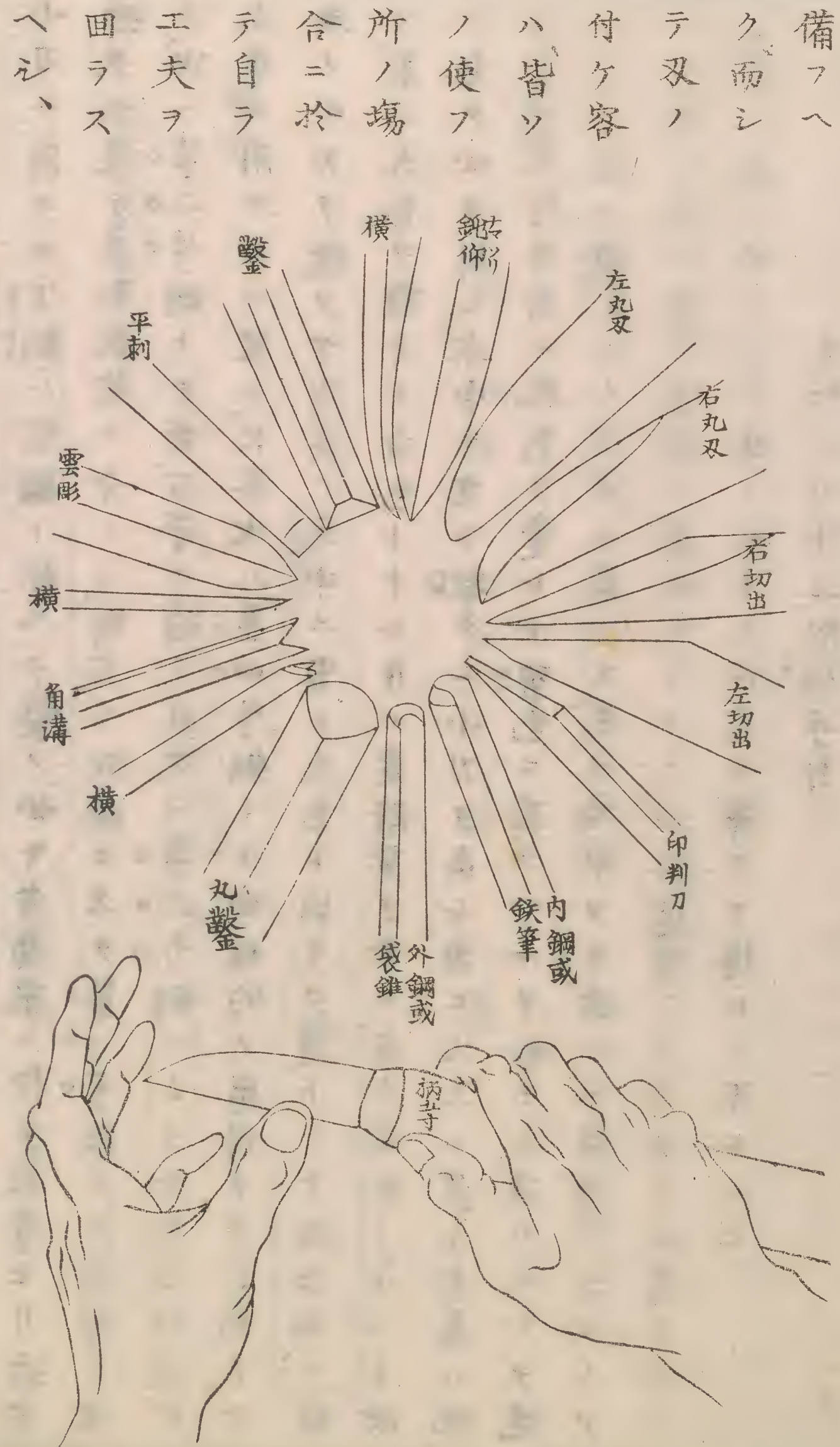
鹿柴氏曰諸畫而來神明則有法可無法亦可惟先埋筆成塚研一水而後嘉陵山水李思訓屢月始成



象牙刻ノ小  
礪ク片ニ當  
ムル也、  
而シテ  
ソノ小  
刀ニ凡  
ソ一形  
五六本  
ヲ要ス  
ル者十  
レハ都  
合百四  
五十本  
ヲ備ヘ  
サル可ラス、



象牙骨角小刀二十四形併手付



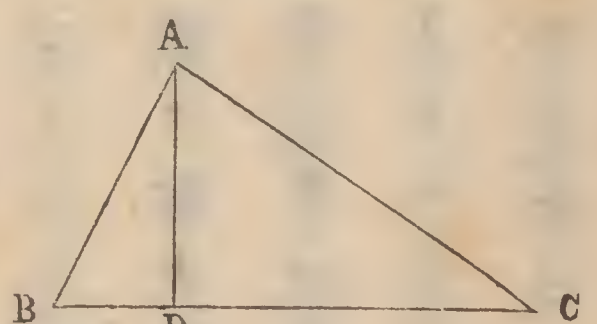
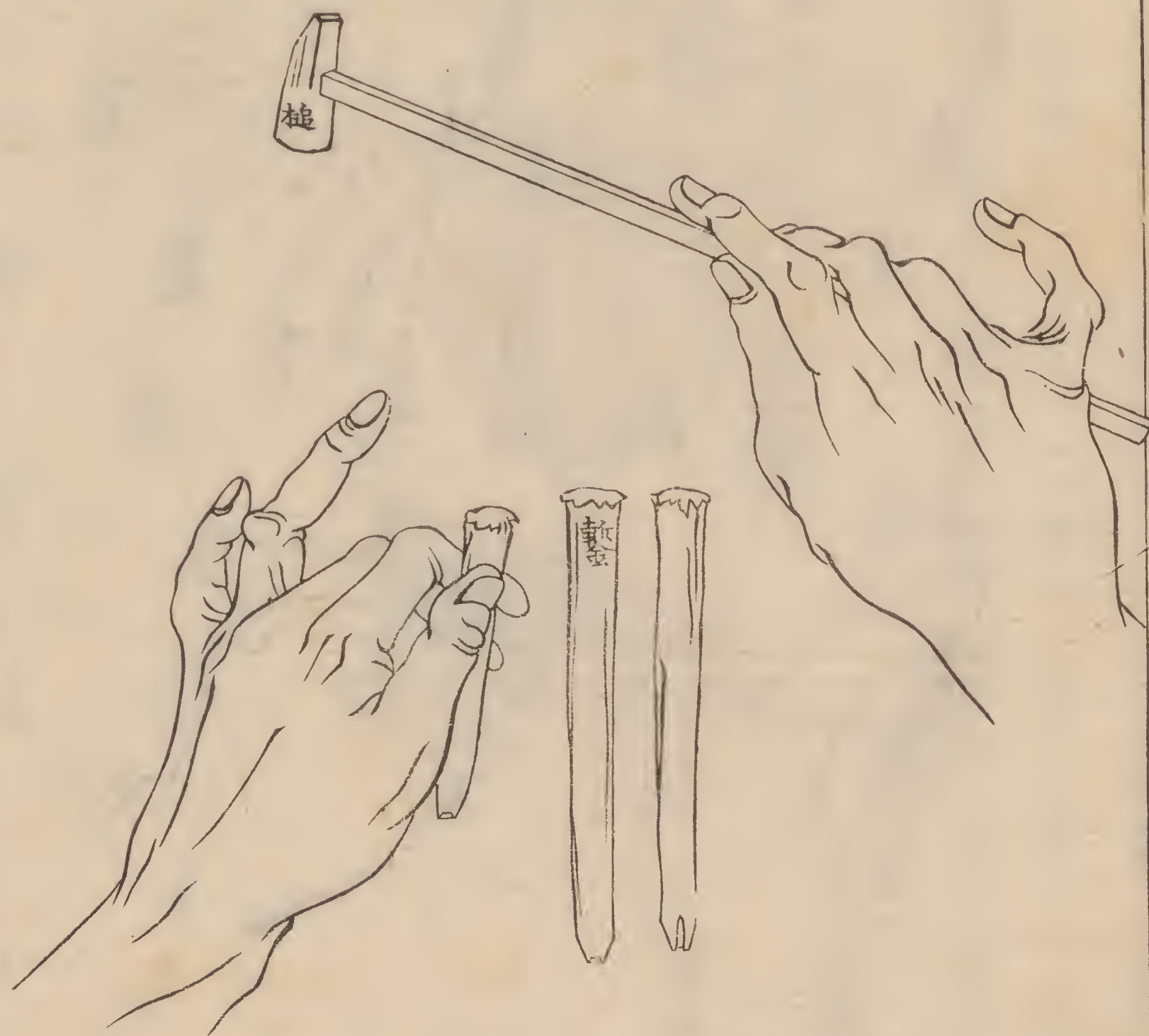


金属刀併手付

金属ヲ彫刻スルハ他ノ木竹  
 牙角ヲ彫刻スルト其仕方大  
 ニ異リテ鑿ヲ使フ者ナレハ  
 趙ヲ以テ叩カサレハ刀痕ヲ  
 見セシムルヲ能ハス故ニ図  
 ノ如ク鑿ノ形ト手付ヲ見テ  
 其理ヲ考フヘシ又ハ皆木竹  
 牙角用ユル所ノ又ニ稍急  
 又ナルノミ其種類ハ甚タ多  
 クシテ三十五六品モアリ彼  
 是大小三百本餘ヲ用ユ

比例線解

此ノ図ハABCナル不等辺三角形ナリA点ヨリD点ニ垂線ヲ下シテC  
 D線ハ法ト名ケDB線ハ適用スヘキ物体ノ尺度トスル也故ニ今二寸ノ



牙角ヲ碎ヒテ人跡ヲ造ルニ當テヤ人間普通ノ身  
 ノ丈ケハ五尺三寸ト定メ而シテ腕ノ長ハ二尺五  
 寸トカ又顔ノ長ハ七寸トカノ連合ヒヲ以テ二寸  
 ノ牙角ニ當嵌ント欲スルモ物理上出来得ヘキニ  
 非ラサレハ一層之レヲ縮メテ人跡ヲ

五寸三分ニ腕ヲ二寸五分ニ顔ヲ七分トス而モ  
 尚未タ二寸ノ材料ニ之レヲ適用スルヲ得サル  
 カ為メ是ニ於テ比例式ヲ以テ

$$(53:25) = (20:2) = 94\frac{18}{33} \text{ 又ハ}$$

$$(53:25) = (20:2) = 26\frac{22}{33} \text{ トナ}$$

二寸五分

シカ如キノ勞ヲ執ラサルヘカラス

夫レ如斯事ノ物ノ彫刻スルニ從テ

筆算ヲ弄スルニ於テハ煩雜宛マリ

キ故ニ之レカ繁文ヲ

省略セントスル所ハ

三浦清俊傳タリ

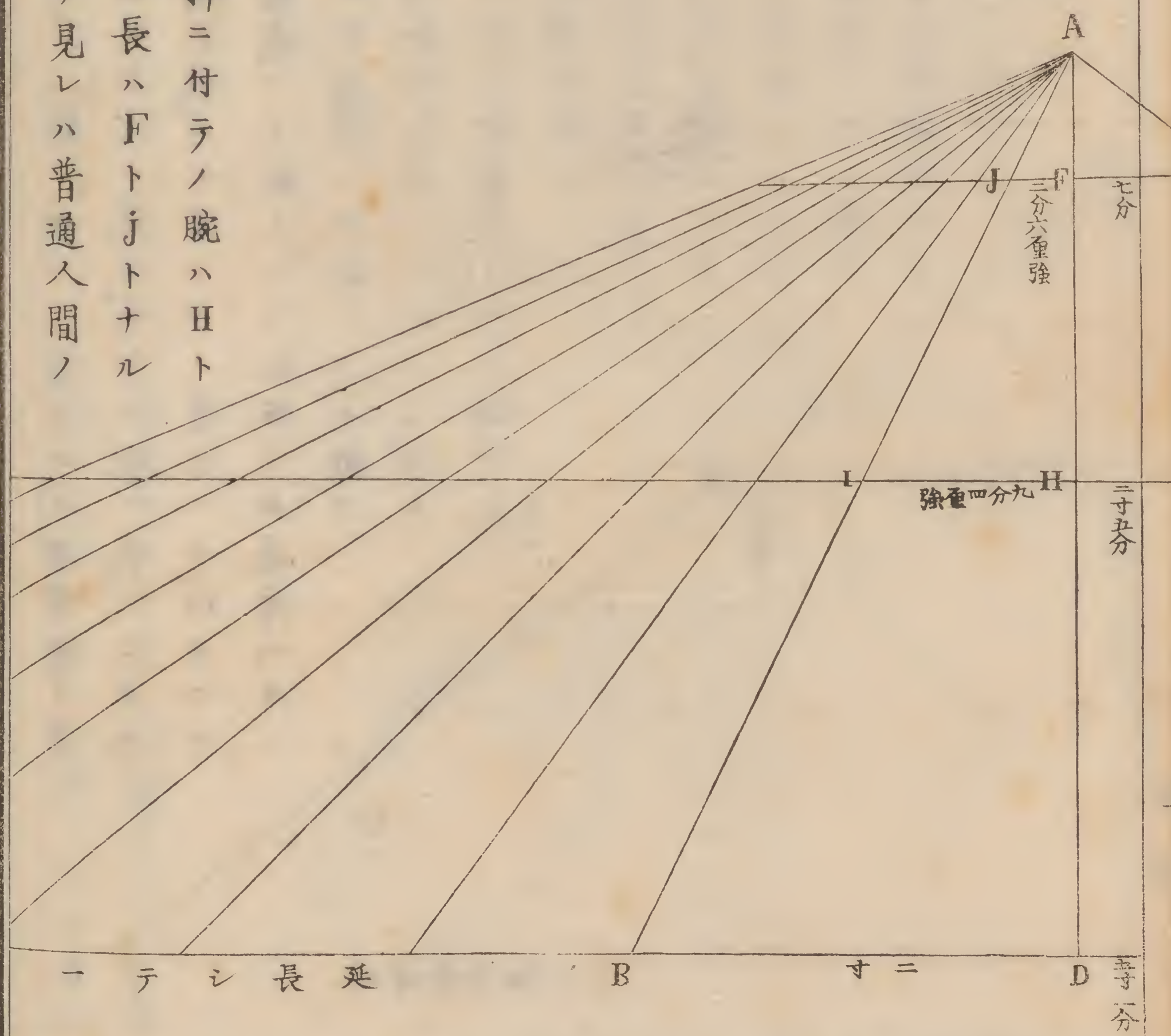
五寸三分

七分

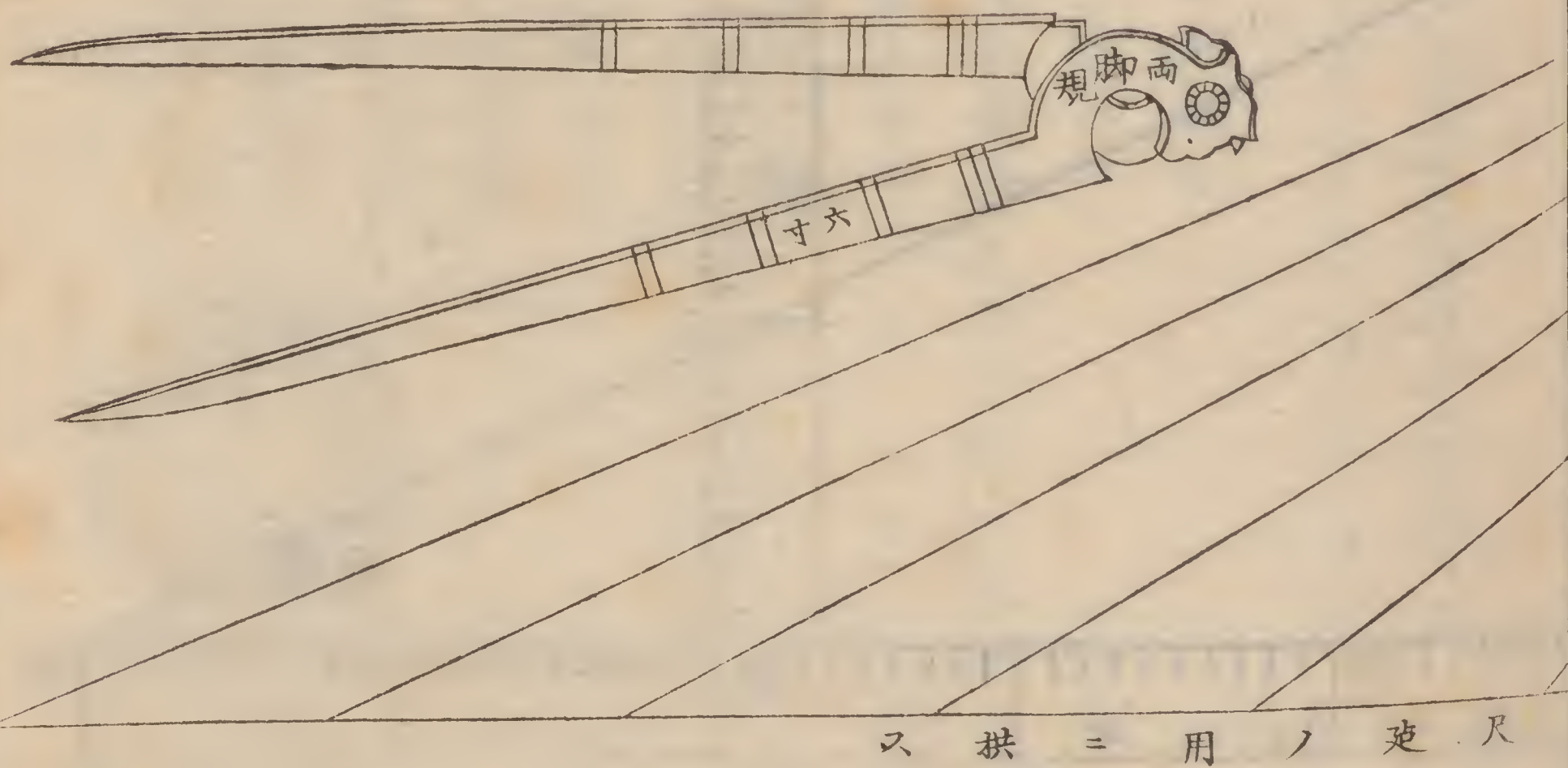
五 乾



図ノ如クスヘシ  
今DC線ノ間則  
チ五寸三分ナル  
人躰ノ縮寸ナル  
ヲ定メ置キ尚延  
長シテB点ニ至  
リA点ヨリB点  
ニ邊線ヲ畫キ又  
GH線及ヒEF  
線ヲ延長シテI  
JトナシDBノ  
間ヲ即チ二寸ト  
スルキハ二寸ノ材料ニ付テノ腕ハHト  
Iトニナルヘク顔ノ長ハFトJトナル  
ヘシ是ヲ以テ之レヲ見レハ普通人間ノ



丈及手足等ノ寸法ヲ解スレハ其彫刻ス  
ヘキ牙角ノ長短ヲ問ハス手足顔貌等調  
度割合宜クスルヲ得ルナリ只其OD線  
及ヒDB線ノ長短ニ從ヒ則チ延長ノ如  
何ニ依テ顔及ヒ手足等ヲ比例シ得ヘキ  
ナリ例ヲ舉クレハ三尺ノ鶴ヲ六尺ノ材  
料ニ彫刻スルニ於テモ同シ理ニテ出来  
シ得ヘキ也故ニ既ニ明カナリ居リタル  
尺度ヲ兩脚規<sup>コムパス</sup>ヲ以テ之レヲ定メ置キ今  
新ニ求メント欲スル向キニ轉ジ其比例  
ヲ以テ彫刻セハ技藝ノ工拙ハ其人ニア  
リト虫躰ハ小格ニシテ頸太ク又顔小サ  
ク腕肥太ニ或ハ足長クシテ躰格ノ瘦細  
ナルカ如ク餘リ見苦敷繪画彫刻物ノ故  
良ヲ裨補スルニ庶幾ラレ歟





比例尺解

先ツ圖ノ如ク尺度ヲ作り、A点ニ綵線ヲ付ス、既ニ解説セシカ如ク人間ヲ五尺三寸ト定ムル片ハ、C点ニアル尺ヲ五寸三分ノ處ニ据置キ、又材料ヲ二寸ト定ムル片ハB点ニアル尺ヲ二寸ノ處ニ据置キ、而シテ

此ノ人  
軀ニ對

シテ求ムル所ノ腕ノ長サニ寸五分トセハ、則チA点ニアル綵線ヲ二寸五分ノ處ニ張ルヘシ、然ル片ハ其二寸ノ材料ニ對シテハ、B点ノ尺度ニ九分四厘幾等ト云距離ヲ見ルヘシ、即チ之レヲ兩脚規ニ度リ采ツテ直ニ現品ノ材料ニ轉遷セハ前



線綵

A

尺ノ人

ノ比例

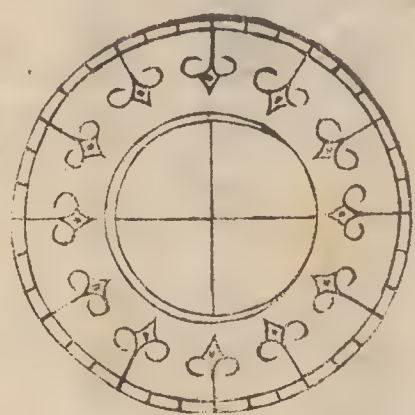
線ト同

クツノ

用ヲ達スルニ便ナルヘシ故ニ克ク此ノ比例尺ヲ精密ニ制作シテEDニ本ノ支尺ヲ左右ニ動かスヲ得セシメハ材料ノ大小長短ニ拘ラス自在ニ用ヲ達セシムヘシ亦新ニ二寸ノ材料ヲ變シテ四寸ノ亀ノ甲ヲ八寸ノ大ヒサニ作ラントスルニ當ツテモ同シ理屈ニテC点ニ接スル尺ヲソノ八寸ノ處ニ近シB点ニ接スル尺ヲ四寸ノ處ニ進メハ大小度ル所皆同クD点ニ向テ綵線ヲ張ルヘシ左レハEB尺ノ部内ヲ經過スル即チ亀ノ甲ノ巾三寸トスレハ其三寸ノ處ヲ見定メDC尺ノ部内ニ三寸ヲ倍捷シタル距離ヲ生スヘシ之レ即チ八寸ニ對シテノ寸法タルヲ知ルヘキナリ



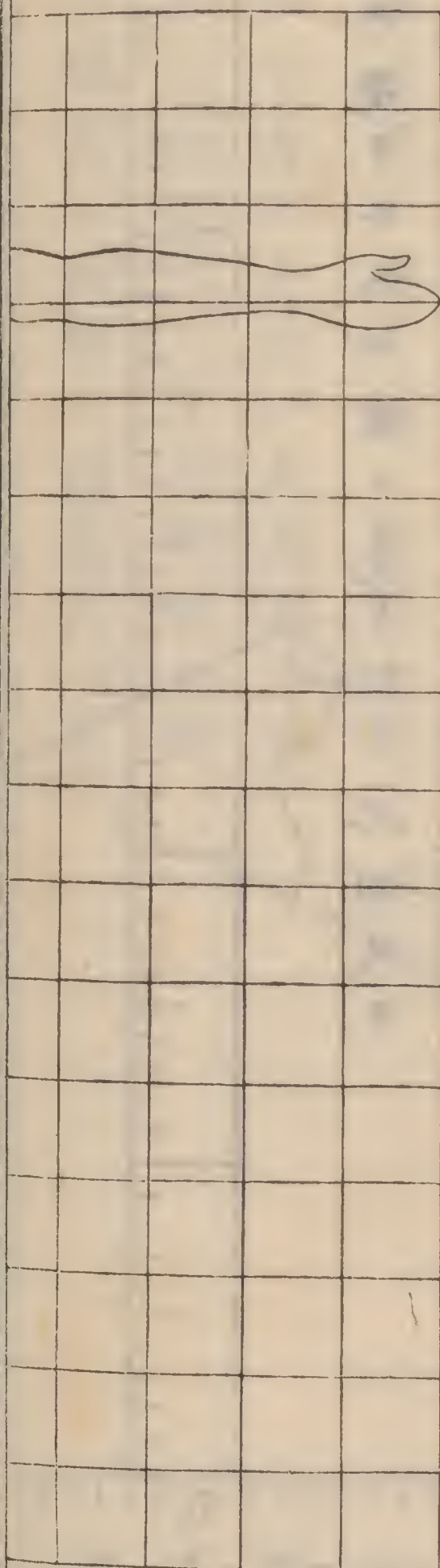
明玉始





人躰ノ割合

人躰ノ割方ニ四種アリ、何レモ其物ニ依テ應用セシ者ナレハ皆左ノ図ヲ見テ悟ルヘシ。一ハ碁盤割トテ十六卦四面ノ図ヲ製シ、以テソノ中央ニ人躰ノ形ヲ画ク。凡ハ骨格ノ割合宜キヲ得ルナリ。二ニハ六割法トテ頭ノ頂上ヨリ足ノ指底迄ノ寸法ヲ六寸ト見積ル。凡ハ之レヲ切半シテ三寸ノ処ハ即チ耻骨部ト定メ是ヨリ上部ヲ三分ノ一部即チ一寸ヲ顔及頸トス。餘ノ二部ナルニ寸ヲ胸腹ニ充テヘシ。肩ノ廣サハ顔頸ヲ以テ準トセハ、則チ一寸ニシテ中心ヨリ左右ニ五分宛ヲ出タスヘシ。臂ト腕トハ一寸毎ニ屈接シテ五分ハ又タ手トナル。而シテ之レヲ左右ニ伸張スル。凡ハ両手ノ指先ヨリ六寸トナル。是レ亦タ碁盤割ト同シ。理屈ニシテ只卦ヲ引クノ勞ヲ省クノミ。但皮肉ノ輪廓ヲ



画ク。凡ハ

耻骨ノ下

端ニ二分

計ノ優餘

ヲ置クヘ

シ是レ所

謂坐点ト

モ名クヘ

キ哉下部

ハ即チ耻

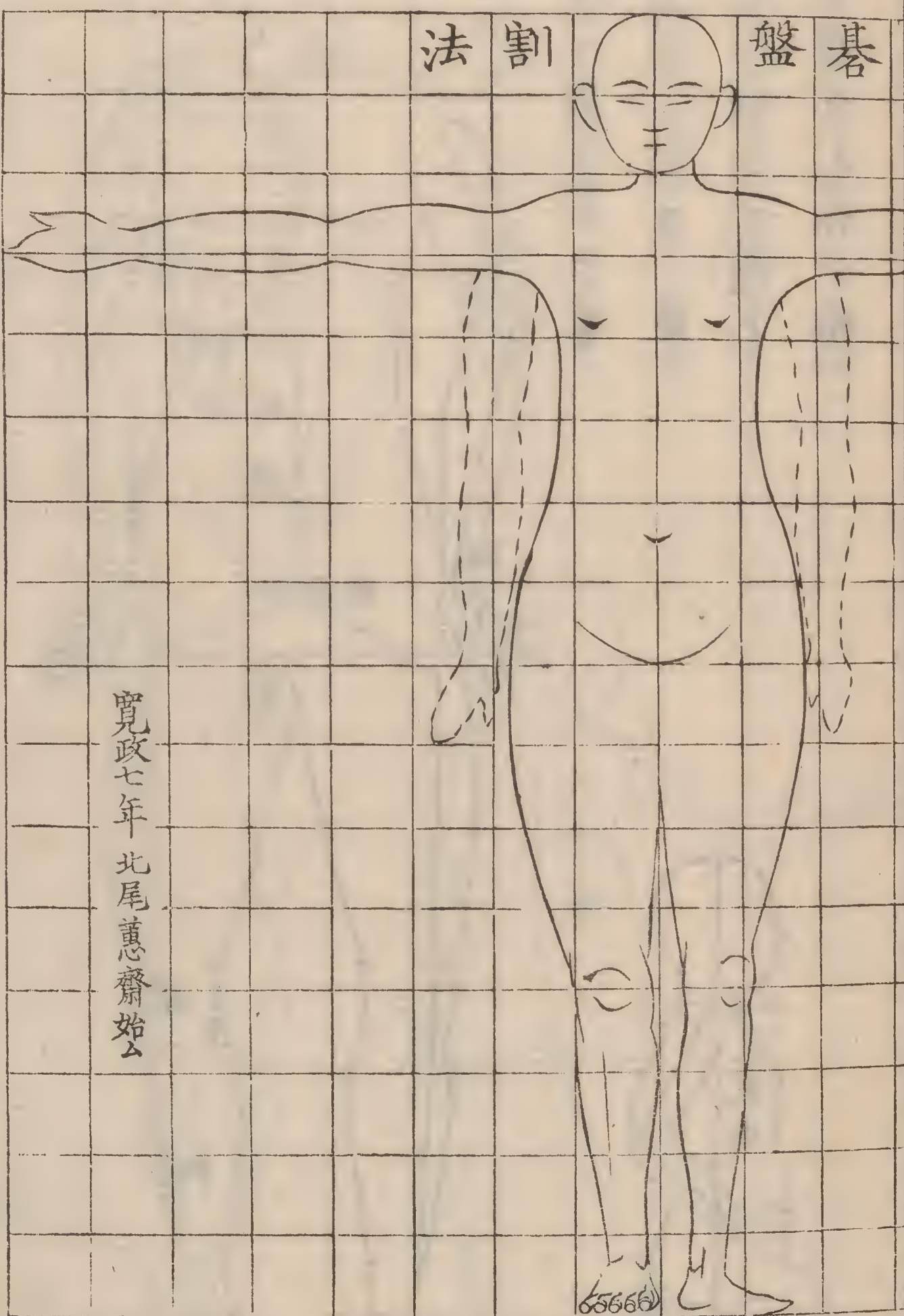
骨ヨリ足

迄ヲ切半シタル一寸五分ノ処ヲ膝トセハ、割合甚タ全フスヘシ。三ニハ五

割法トテ兒童ノ割方ナリ。凡テ小児ハ徒然見ル。凡ハ頭部甚タ大ナリ。是レ身

体ノ生育ハ支体ニ長スル者矣。小児ヲ寫ス。凡ハ此ノ割方ニ基ケハ、ソノ連合

ヲ失ハス。諸ソノ割方ハ頭ノ頂上ヨリ足ノ指底迄ヲ五分シテ、ソノ一部ヲ



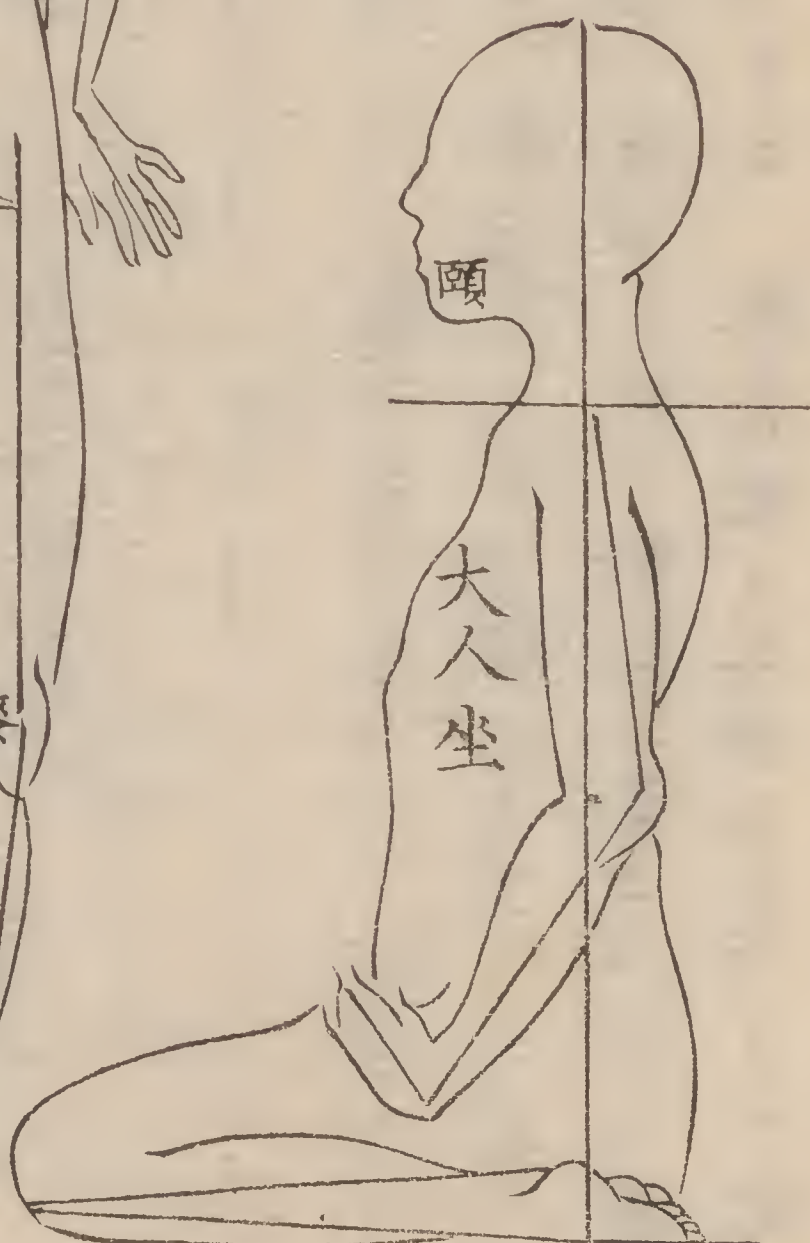
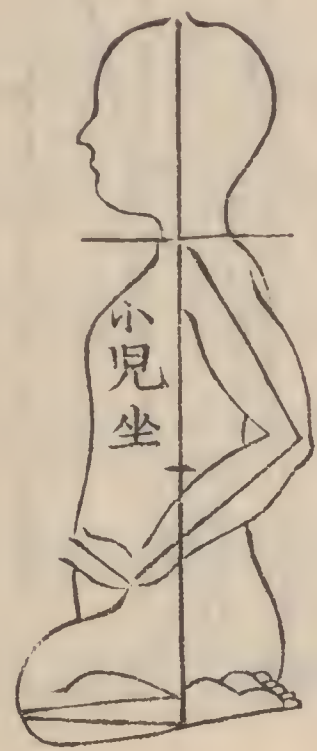
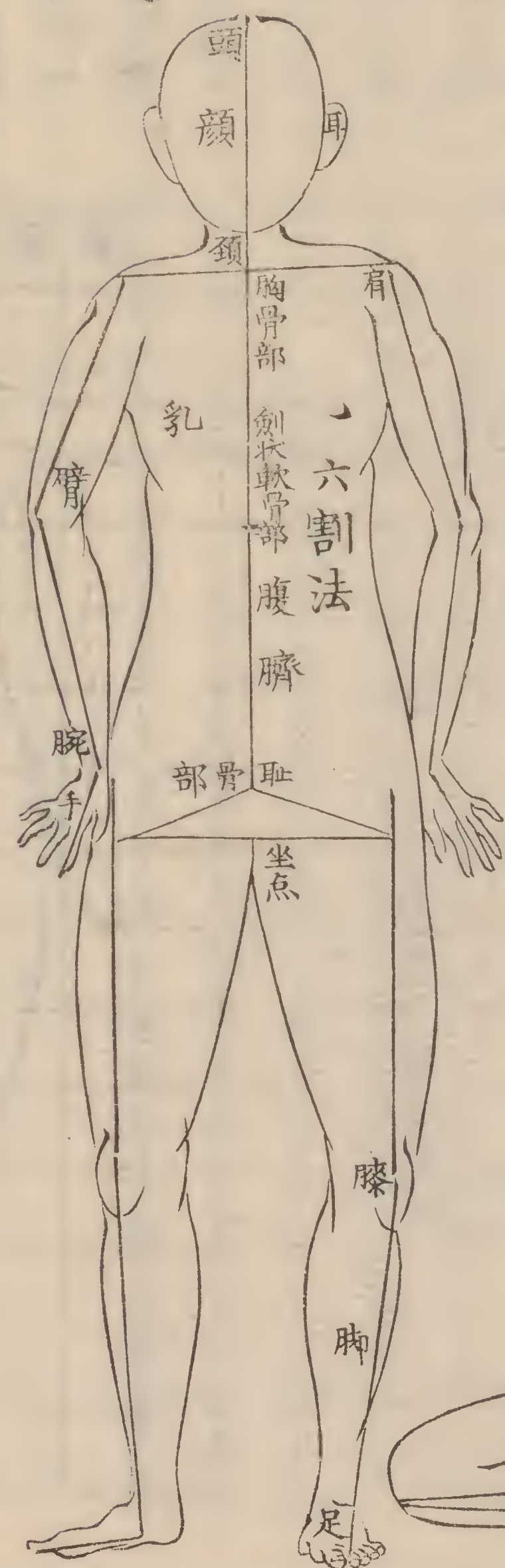
寛政七年北尾蕙齋始



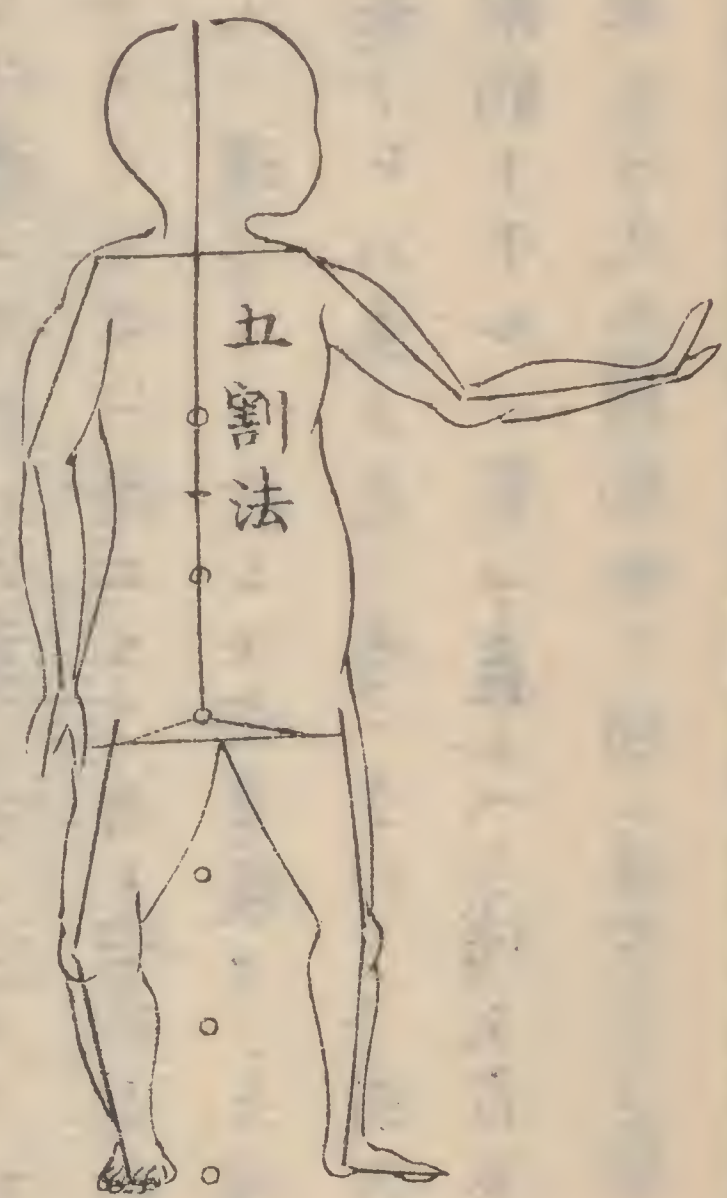
顔頸トスヘシ肩中ハ顔頸ヨリ  
少ク縮ムノミ其餘ノ割方皆大  
人ノ六割法ト同シケレハ図ヲ  
看テ悟ルヘシ四ニハ二節割ト  
テ六割法ノ一部ヲ唯ニ節トセ  
シ者

ナレ  
ハ全  
体ニ  
差違  
一ナ

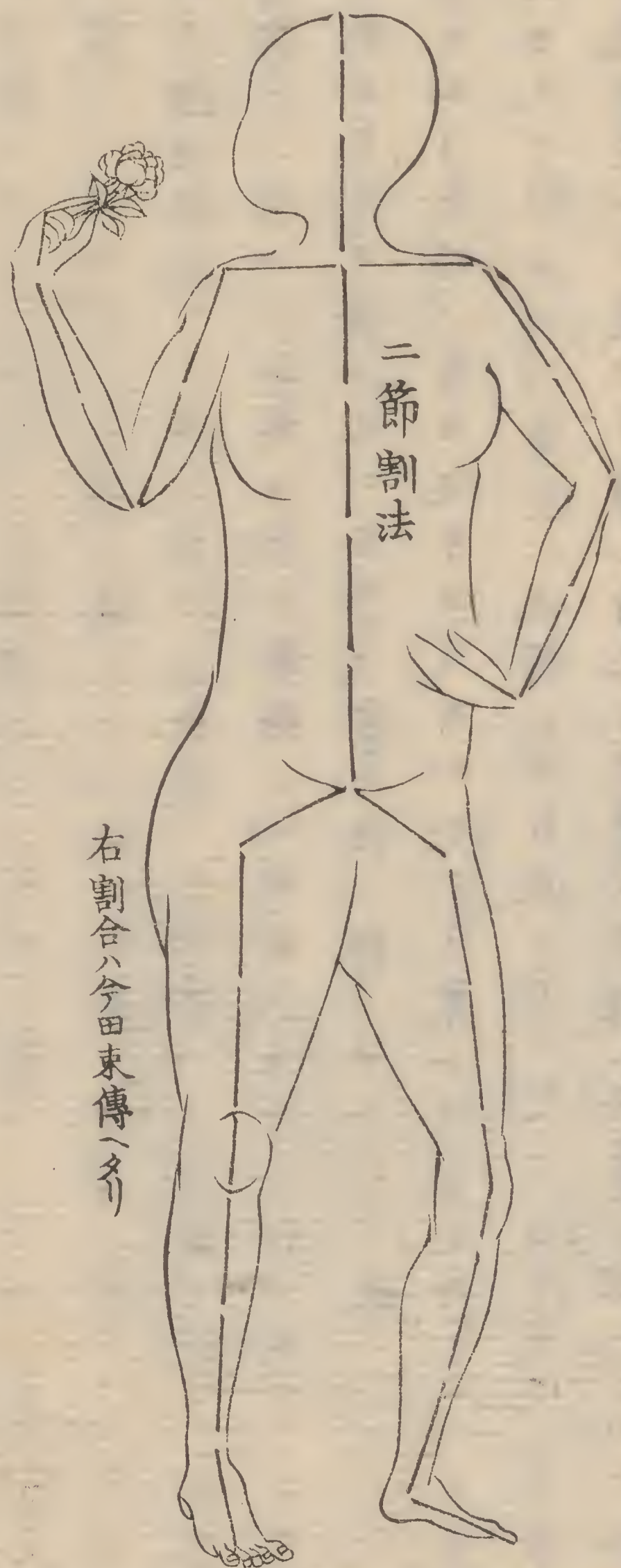
ク皆前ノ割方ト同フシテ姿  
貌ノ偏曲ヲ自在ニ寫スノ便  
アリ克ク是レニ依テ皮肉ノ  
輪廓ヲ画ケハ自ラ人体ノ格



ヲ悟ル其掌ノ大ハ半面ヲ掩  
フヘク足ノ長ハ手ノ半分ヲ  
過ク身ノ長短ハ面ヲ以テ準  
トナシ立像ハ七坐像ハ三半  
ヲ則トス亦面法ニ由申甲田



同王  
圓目  
用風  
之レ  
ヲ十  
字面  
法ト  
謂フ



右割合ハ今田東傳ヘリ

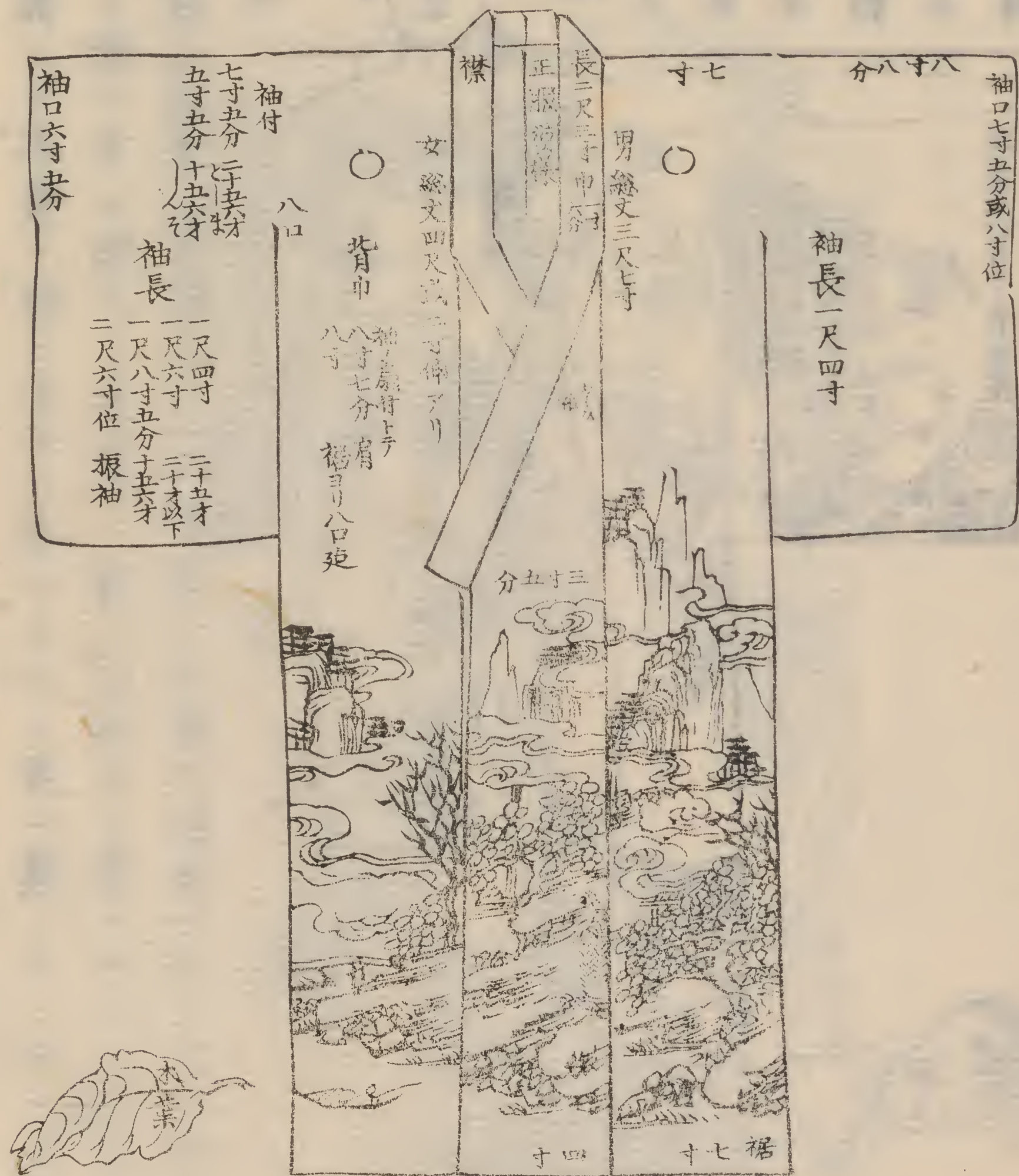
學者以ノ道ヲ知テ繪画彫刻ヲ學ヘ  
ハ千變万化須クソノ自在ヲ得ヘシ



衣服

人躰ノ割方ハ前圖ノ解釋ヲ以テ畧知ルヲ得ルモ之レニ如何ナルモノ  
ヲ着ケテ装ヒヲナスヤ果シテ衣服ヲ以テ肉体ヲ翳スル者人ノ常ニ知ル  
處ナリ然ルニ僅カクノ衣服ノ為メニ人体ノ外貌ニ變革ノ生スルヲ尤モ  
多ク就中繪画彫刻ニハ極テ名ケテ衣紋ト云四季アリ模様ヲ殊ニス都鄙  
アリ貴賤アリ皆以テ形容ヲ分ツ衣服ノ功用亦大ナリ人物ヲ描クヲ學  
テ日々已レカ心ヲ修メ已レカ手ヲ磨キ攷ミ挽マサレハ自然ツノ手ニ光  
輝ヲ發スルヲ自己ノ甚タ近キヨリスル處ナリ然ルヲ吾人共ニ之レヲ棄  
テ、只々人ノ製圖或ハ筆痕ニ依頼シテ自治ノ力ニ乏ク古今大家カ名筆  
良刻ヲ見テ是レニ迷フヲ多シ自己カ技藝ノ光輝ハ修業ノ餘ニアルヲ知  
ラスシテ克ク人ノ筆痕ヲ模範トスルヲノミ之レ務ムルヲ勿レ噫終身師  
ニ學テ師ニ如カサルハ是レ則チ古人ノ遺言ナリ然レモ尚筆痕ヲノミ模  
擬スルノ道ニ趣キヲハ人情ノ通弊ナレハ克ク自ラ考ヘテ以テ千遍万  
習ノ餘ハ雛形漸ク進ンテ画トナリ彫刻トナルノ意ヲ慮ルヘシ借上古未  
タ人間タルノ名ヲ知ラサル以前ハ果シテ人ハ諸動物ノ間ニ混交シテ裸

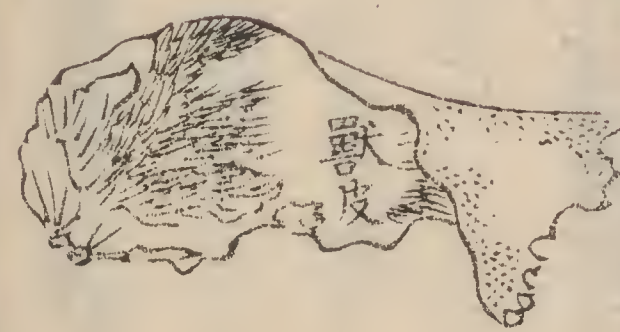
蟲ノ部内タルヲ疑ヒナシ然ルニ人事関ケテ禽獸ト全クソノ智恵ヲ異ニ  
スルヲヲ悟  
リタル以上  
ハ自ラ人間  
タルノ分定  
マリ各義務  
ヲ帶フルノ  
世界トナル  
茲ニ於テカ  
始メテ貴賤  
上下ヲ示ス  
ニ衣服ニア  
ラサレハ其  
躰ヲ別ツ  
能ハス又寒





身章撮要云  
衣服之章  
也古者未  
絲麻而衣  
衣鳥獸之  
皮爰自義  
而降衣之  
制興聖人  
物取義乾  
莫不有制  
寓乎其間  
者或曰周  
故施袍

熱ヲ防クヲ能ハス木葉ヲ綴リ羽毛ヲ編シテソノ身ニ纏フハ則チ衣服  
ノ始メニシテ漸ク年ヲ歴月ヲ重ヌルニ隨ヒ思情日ニ濃カニシテ寒熱ノ  
加減ヲ慮リ禮式通常ノ裝飾及ヒソノ模様ノ分別ヲ創造シテ以テ衣服ヲ  
着クルニ至ル  
而シ  
テソ  
ノ服  
制タルヤ古今  
殊ナリト魚先  
ツ此ノ図ハ當  
世通常服ヲ身  
ニ纏フノ容貌  
ヲ示シテ褌ノ  
生スル形ヲ得  
聊衣紋ノ心得



描法十八則  
高古遊絲描  
琴絲紋描鐵  
線描行雲流  
水描馬蝗描  
葉描釘頭鼠  
尾描柳葉描  
曹衣描蛇蚶  
描橫頭釘描  
混描竹葉描  
折芦描寒枝  
描撇攏描戰  
筆水紋描枯  
柴描減筆描

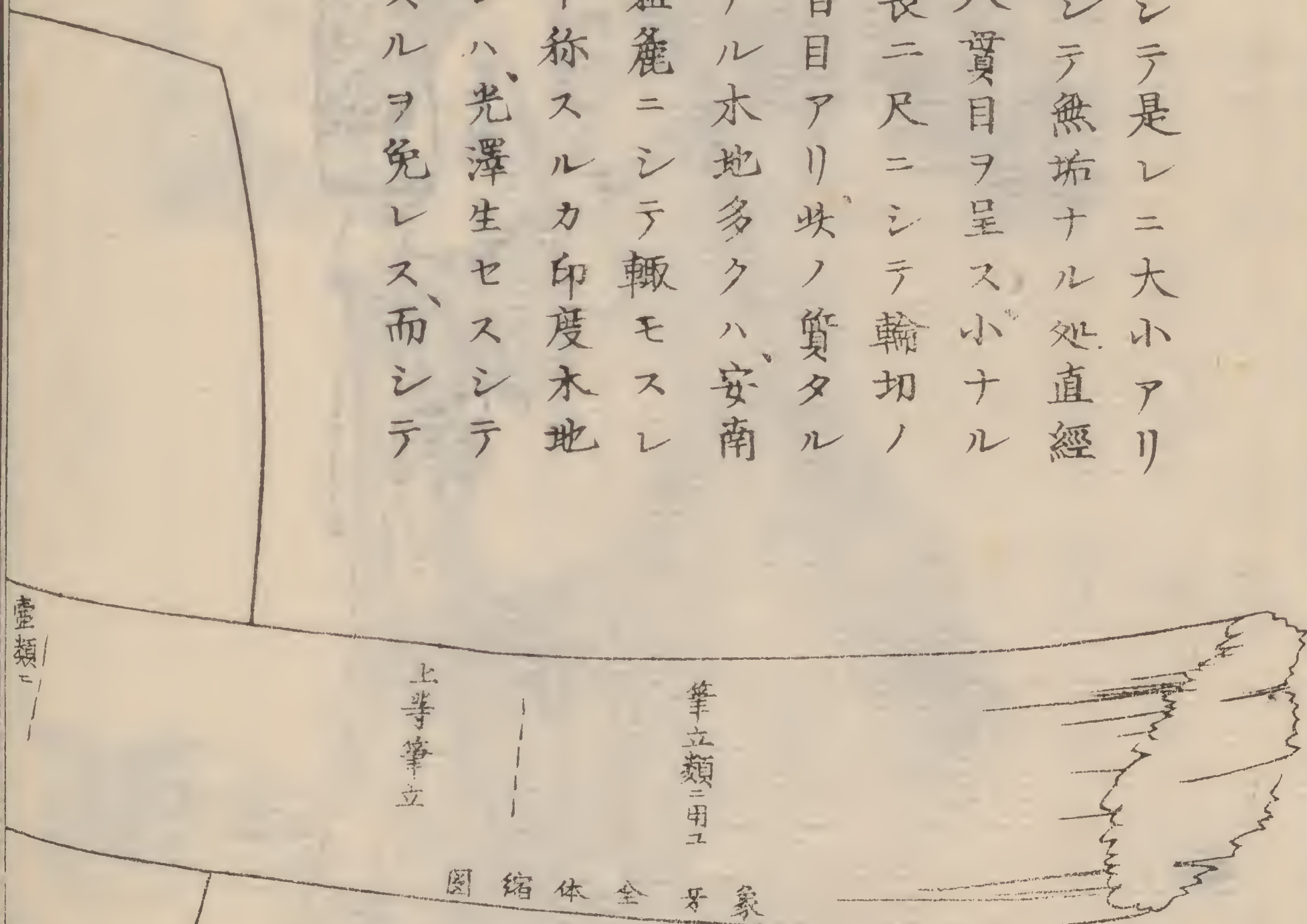
ヲ傳フルノミ  
是レヲ心得テ  
後運筆ノ發達  
運刀ノ截味各  
其心意ニ任セ  
修業  
ノ成  
功ヲ  
待テ以テ  
世ニ顯セ  
ハ當ラス  
ト魚遠ラサル  
ノ繪画或ハ彫  
刻品ヲ製作ス  
ルコトヲ得ン





象牙

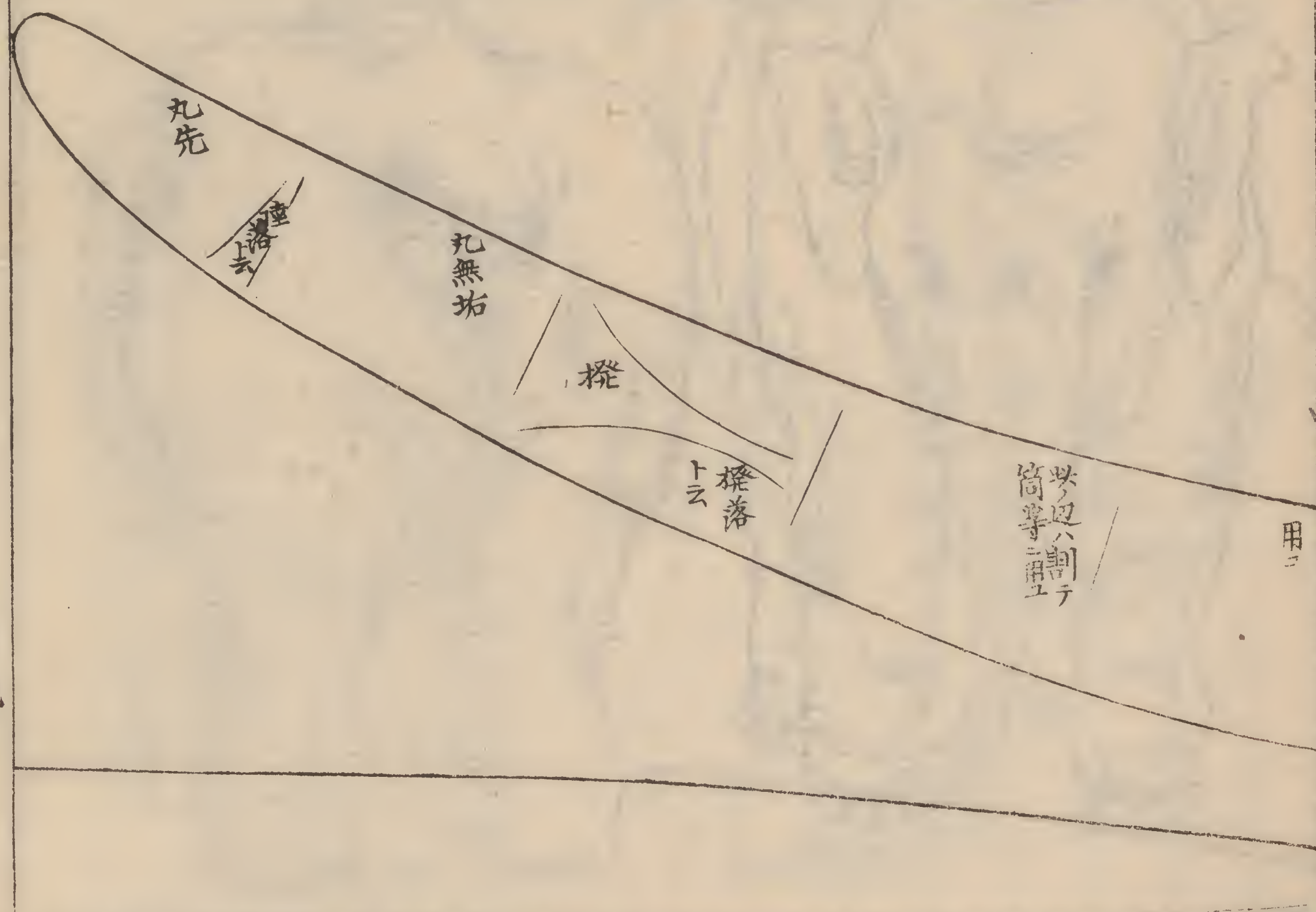
象牙ノ全軀ハ圓ノ如キ者ニシテ是レニ大小アリ  
其大ナル者ハ長九尺輪切ニシテ無垢ナル処直經  
七寸餘アリ其重量ハ凡ソ十八貫目ヲ呈ス小ナル  
者ハ呖レヲ牛房水地ト称ヘ長二尺ニシテ輪切ノ  
直經一寸八分重量凡ソ五六百目アリ呖ノ質タル  
ヤ水色ヲ含テ点目細密ニ味アル水地多クハ安南  
水地ト称ヘテ其價貴ク点目粗麁ニシテ輒モスレ  
ハ割レノ生スルヲ印度水地ト称スルカ印度水地  
ハ磨ク時モ稍勞力ヲ加ヘサレハ光澤生セスシテ  
着色ノ時ニ當テハ班点ノ生スルヲ免レス而シテ  
亦此ノ一般磨クヘキ事  
実ハ実業者ノ克ク知ル  
処ニシテ別ケテ述ル  
ヲ欲セサレ氏只素人ノ



為メニ聊其仕方ヲ述ヘ

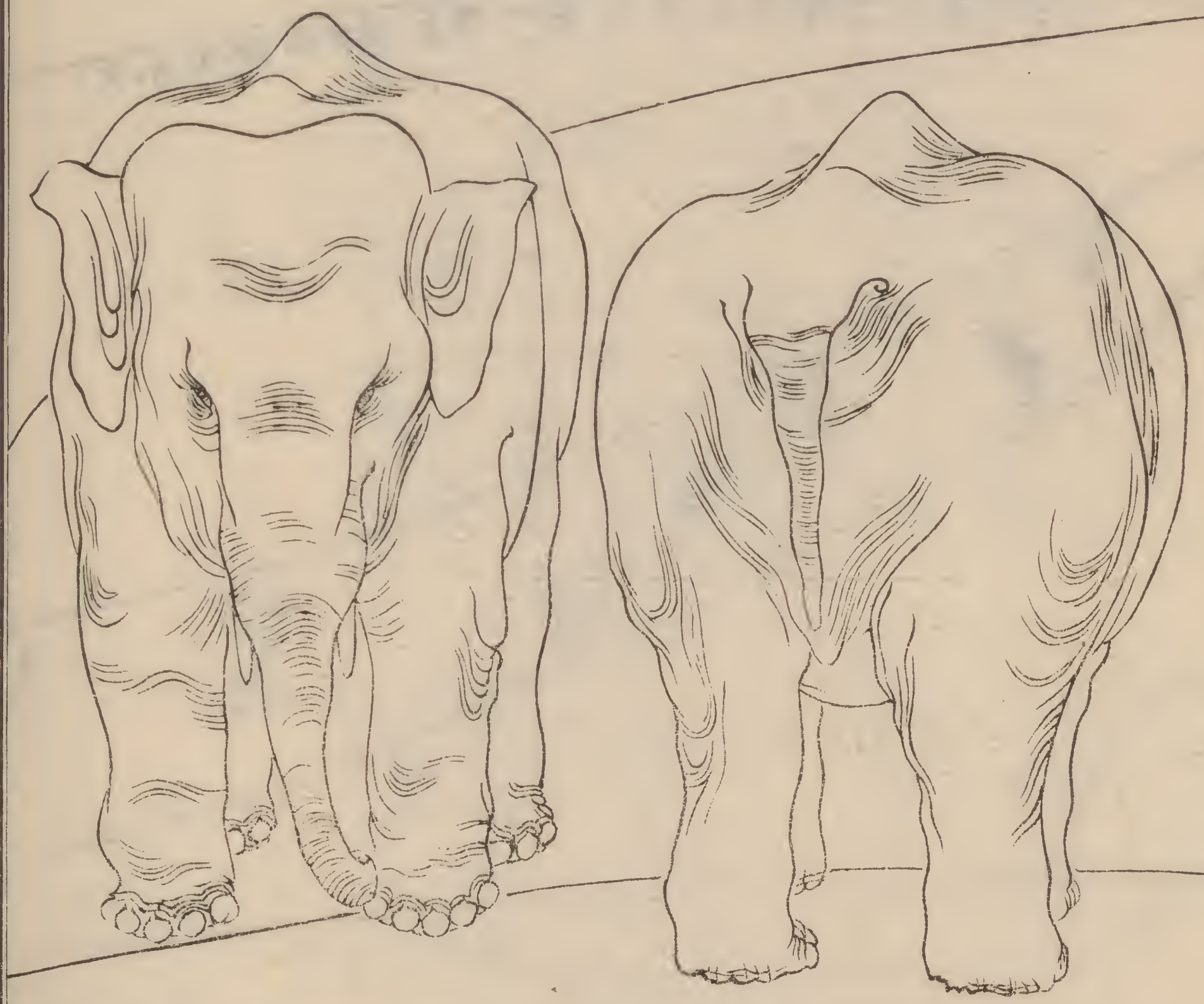
レ其磨クヘキ物品ハ木  
賊棕葉磨砂角粉或ハ新  
藁トス皆之レヲ水ニ浸  
シテ其潤タル後幾偏ト  
ナク他ヲ觀ニス腕ノ勞  
疲ヲ恐レス一心ニ磨擦  
セサレハ光澤ヲ生セシ  
ムルヲ能ハス尚又精密  
ナル彫刻物ノ間隙ヲ磨  
ク片棕葉ヲ使フ自由  
ナラス故ニ楊枝ニ精粹  
ナル砂或ハ角粉ヲ付着  
シ以テ磨擦セハ刀痕ヲ  
失ハスシテ光澤ノ生ス

大丸先現品如圖重量一貫二百目代價凡四拾五圓

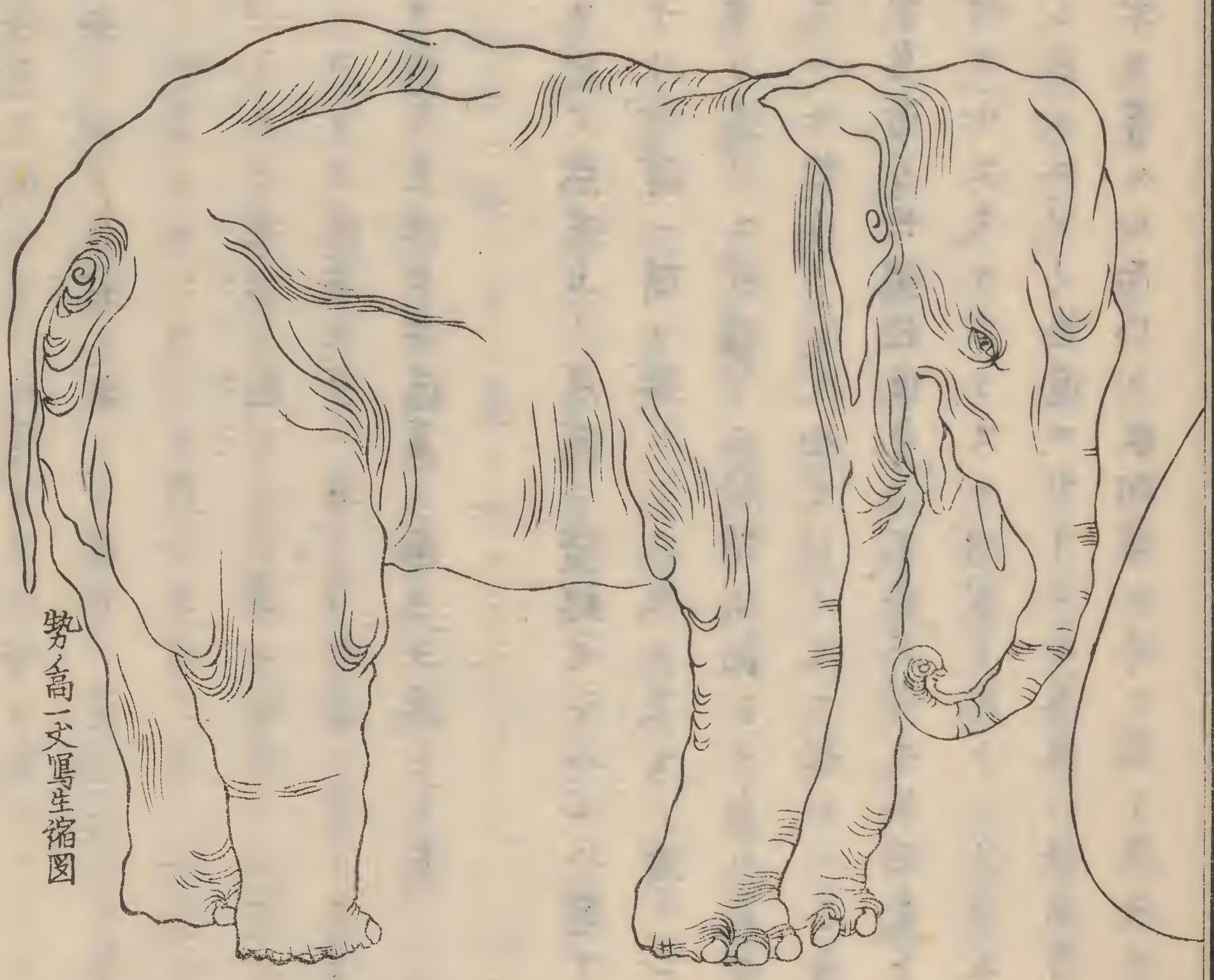




ルアリ、而シテ堅實ノ象  
 牙ハ、棕葉ヲ要スレ、凡木  
 賊ヲ用サルヲ好シトス  
 「古ヨリ象牙ヲ貴重スル  
 ハ深ク其意ヲ傳ヘサレ  
 凡其象タルヤ千斤ノ重  
 キヲ載セテ重シトセス  
 馴レテ愛スヘキ也ノ工  
 大獸自ラ他ノ走獸ト異  
 ナリ、克ク語音ヲ弁ス、壽  
 亦長シテ命數ヲ知ル人  
 稀ナリ、兩長牙アリ、頭俯  
 シ可ラス、頸回シ可ラス  
 口頤ヲ隱ス、地ヲ去ル  
 速シ、運動鼻ヲ以テ用ヲ



ナシ一軀ノ力皆鼻ニア  
 リ、將ニ行ントスル片先  
 鼻ヲ地ニ柱シ以テ足ヲ  
 移シ、殊ニ鼻孔深ク、開闢  
 以テ物ヲ取ル、水ヲ飲ム  
 ニモ鼻ヲ以テ吸テ之ヲ  
 捲ク、足柱ノ如ク指ナク  
 只凡甲アリ、前ハ五個、後  
 ハ四個、形栗ノ如シ、幾歲  
 ニシテ一度牙ヲ換ルヤ  
 脱スル片深ク之ヲ藏  
 ス、故ニ削木ヲ以テ之レ  
 ニ代フル片ハ漸ニシテ  
 得ヘシト、象牙ノ得難キ  
 ハ金玉ト均スルモ宜ナ



勢高一丈寫生縮圖



子曰射有似  
乎君子失諸  
正鵠反求諸  
其身

ル哉殊ニ彫刻家之レヲ得テ稍慮ヲ廻ラサ、ル可ラス心智ヲ施サ、ル可  
ラス一個ノ片塊モ其人ノ智能ニ由テ奇觀ヲ顯ハス無用ノ牙塊、變シテ有  
用ノ物体トナル豈ニ技術家ノ智慧ト云ハサルヲ得ンヤ、弓ヲ張テ鵠ヲ  
得ント欲セハ先ツ其心ヲ正フス、且ツ其器ヲ利ストハ是レ如何ナル意ヲ  
指トナルヤ深ク推察セサルヘカラス、從是以下ハ右ノ刀鋸等ヲ借テ其順  
序ニ基キ実物实体ニ當リ題ヲ設ケテ以テ其道具ノ働キヲ試ミレ矣、

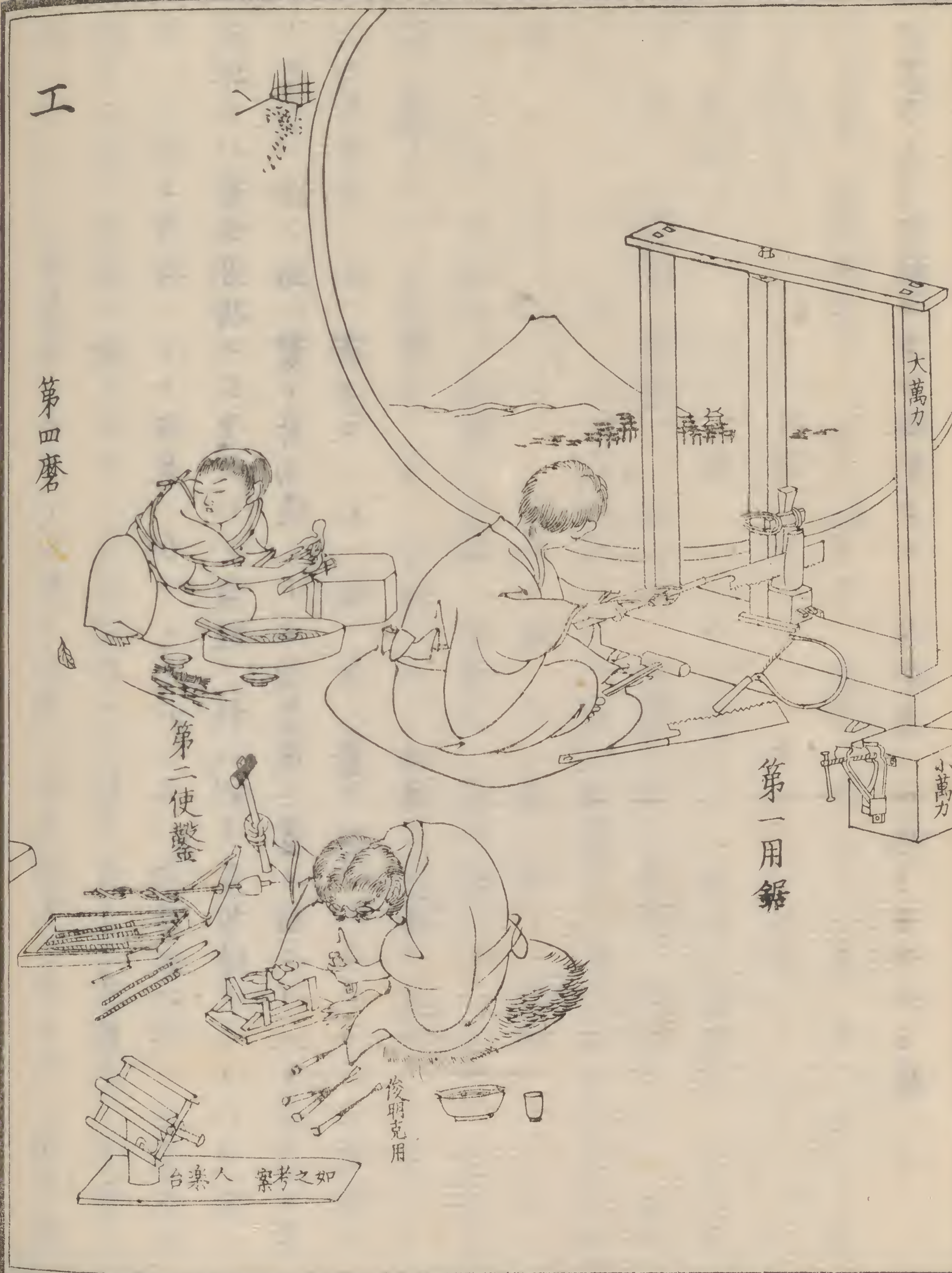
### 題意

千百人目的ヲ同フシテ、進路ヲ定メ、無形上ノ思慮ヲ發起セシムルハ題ヲ  
以テ引誘セサルヲ得サル者ナリ、所謂一隅ヲ舉ケテ三隅ヲ及スノ理ニシ  
テ各意匠ニ依リ小心ト云一事ヲ遺サス、放膽ト云神情活動シテ、自ラ是等  
ニ分別生シ、獨具目的ヲ同クスルモ製体ノ變化必スソノ人ニ起ルヘシ、今  
吾儕リニ政和ノ世ニ生レ、徽宗皇帝カ竹鎖橋邊賣酒家、踏花歸去馬蹄香ト  
歌ノ二題ヲ命セラルレハ、如何ナル工夫ヲ回ラスヤ、酒家ト花トニ注目ス  
ルヲハ、吾人等ノ通例タルヘシ、然ルニソノ魁選ニ中リタル善画ハ、橋頭竹  
外ニ於テ一酒帘ヲ掛ケテ酒字ヲ書スル而已ト、數蝴蝶ヲ掃テ飛テ馬後ヲ

逐フ而已トハ、皆意外ニ出テ、其意ヲ形容シ得テ尤モ妙ナルヘシ、凡テ問  
題上ニ向テ意味ヲ論スル片ハ、直接間接アリ、廐戸皇子、菅原道真ノ肖像ト  
云ヘハ、即チ直接ニシテ、深意ノ在アルニ非ラス、一路清廉之図、一品當朝之  
図、杯トハ、意味間接ニシテ、之レヲ隱題ト称ヘ、則チ音相通スルヲ以テ、描ク  
ト多シ、一路ノ路ハ、鷺ト音相通シテ、水邊葦葭ニ鷺ヲ描クヲ以テ、其意ヲ表  
ハス、亦濱邊ノ浪ノ擣ヂタル処ニ、鶴ノ居ル畫ヲ描クヲ、之レヲ一品當朝之  
図ト題スルナリ、是昔文一品ノ官位ノ服ノ衣紋ハ、仙鶴ノ補子ナリ、故ニ一  
品ハ、一濱ニ音相通シ、當朝ハ、當潮ニ音相通シタル故ニ、文一品官ノ朝廷ニ  
當スルト、云意ヲ祝シテ、一ノ濱邊ニ、鶴ノ居ル畫ヲ掛ケテ、文官ノ人ヲ請フ  
ニ、用ユルナリト、堂上白頭、福祿壽、玉堂富貴、一笑、桃柳四燕、九皋鳴鶴、雞群鶴  
立ノ類ハ、皆間接ノ隱題ナリ、亦山水ノ画題ハ、多ク直接ノ命題ナリト、魚、文  
意ニ牽束セラレテ、文句ノ儘ノミニ、許リ描キテハ、繪画ノ趣向甚タ薄ク、且  
ツ氣韻風致ニ乏シ、故ニ、四趣四季トテ、一ハ遠近、二ハ道路、三ハ水湖、四ハ堂  
宇是等ノ位置經營ヲ心得テ、後文句ハ、規矩ニ据置キ、文意ノ外ノ餘情ノ深  
クアラレトヲ描キ、且ツ彫刻スルハ、美術家ノ本色トセサルヲ得ンヤ



韓退之曰至  
醫樂師百工  
之人不耻相  
師王大夫之  
族曰師曰弟  
子云者則羣  
聚而笑之同  
之則曰彼與  
道相若也  
早則足蓋官  
盛則足蓋官  
可謂知矣不  
復可謂知矣  
醫樂師百工  
之人君子不  
齒今其智乃  
不可怪也歟  
聖人無常師  
孔子之徒其  
賢不及孔子  
則曰三人行  
必有我師  
是故弟子不  
必不如師  
後世之學者  
不察乎此  
而自以為  
不學也  
柳宗元



工

第四磨

第一用鋸

第二使鑿

俊明克用

台樂人 案考之如

場

第五仕上着色  
或寫形

近環顧其中  
未見可師者  
雖貴好言論  
為文章甚不  
自是也才意  
吾子自京師  
幸見取僕自  
卜固無取假  
令有取亦不  
敢為人師且  
衆人師且為  
敢況敢為吾  
子師乎孟子  
稱人之患在  
好為師由  
魏晉氏以下  
人益不事師  
今之世不聞  
有師有師  
笑之以為狂  
不顧流俗犯  
笑侮收召後  
學作師說因  
抗顏而為師  
世果羣聚  
罵指目牽引  
而增與為言  
詞愈以是得  
狂名居長安  
炊不暇熟又  
挈之而東如  
是者數矣

以上連列シタル使用方方法ヲ  
學ヒ又此圖ノ全体ノ次第ヲ  
見テ師匠ヲ煩ハサス先ツ獨  
其業ノ道ヲ悟リ勤メテ餘力  
アラハ尚文ヲ習フヘシ朱子  
所謂切以刀鋸瑤以鑄錫皆治  
骨角之事無用之言而辨之  
急之務而察之非惟無益反害  
於心故當棄而不理ト如斯職  
業者ニ向テ深ク學問ヲ責ル  
ニアラサレト製作物ノ風彩  
ハ學問ノ力問格ニ推布スル  
ト大也而シテ之レヲ學フヤ  
如何只業精於勤荒於嬉行成  
於思毀於隨



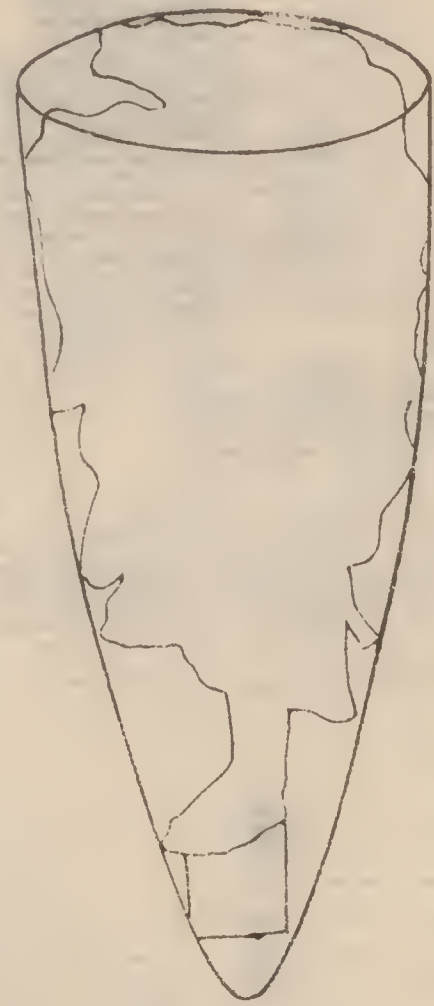
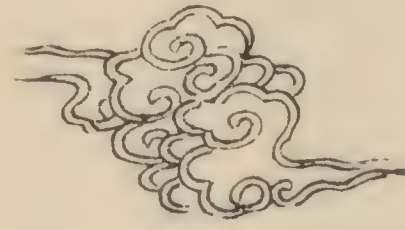
第三使小刀



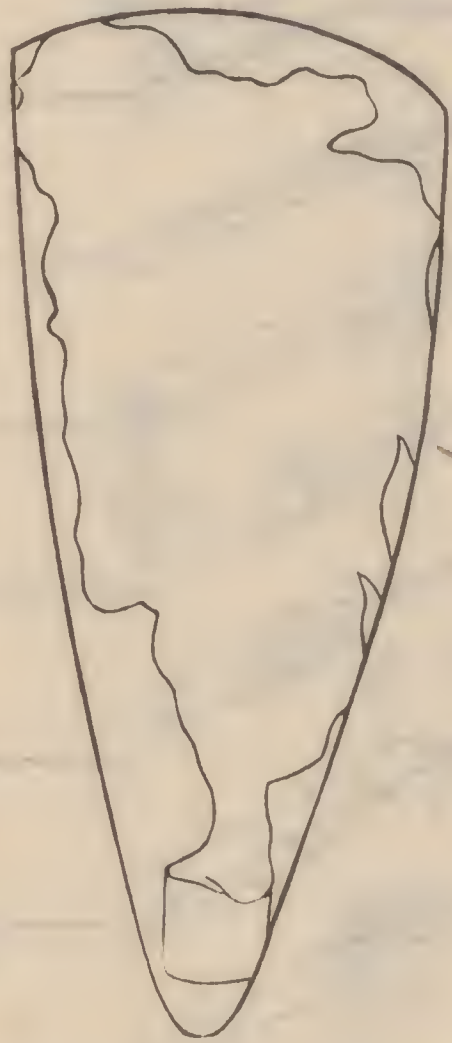
在山泉水清  
出山泉水濁  
社子美  
避世嫌山淺  
逢入說姓稀  
唐崔塗

一 避俗愛鈍  
象牙丸先陸落合本地高二十七分蝦蟇之廣一寸一分  
明治十九年三月廿六日作

模樣



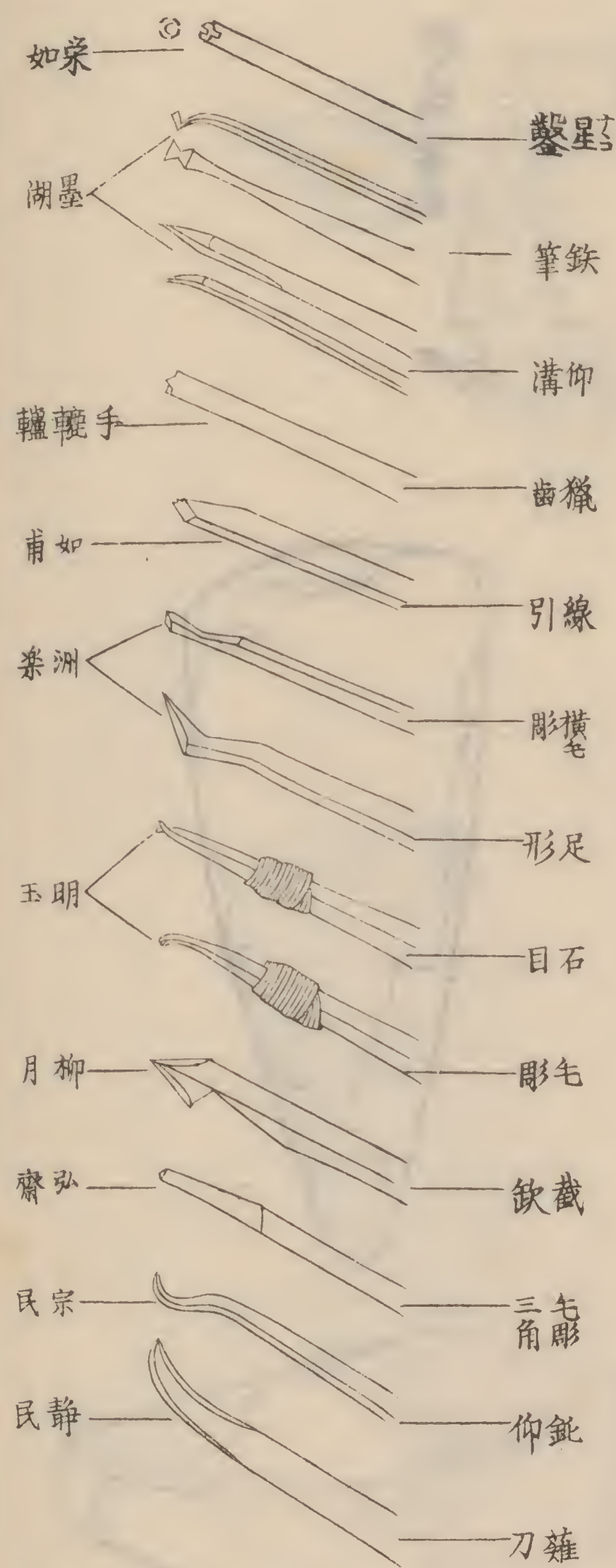
背面寫生





變形小刀

前ニ掲ケタル小刀ヲ以テ、一般ノ彫刻ヲナシ得ルト雖、更ニ又左ニ載セタル諸形ノ小刀ヲ用ユレハ大ニ便利ヲ感スヘシ、是皆實業者カ毛彫リ模様彫リ等ノ仕上ノ場合ニ臨ミ、適宜ニ改良シタルモノニシテ、其銚ト柄ノ長短ハ各自ノ便宜ニ造レルモノナリ、總テ是等ヲ研ク片ニ尤モ砥石ヲ撰ハサルヘカラス、蓋シ截味ハ元ヨリ下綱ニアリト雖、砥石ニ因テ利鈍ノ變更ヲ来タスモノナレハ、能ク之ヲ心得置クヘシ、



着色心得

○古代色

一 矢車

矢砂氏云當時矢車越幾斯ナ  
ルモノ製出シテ尤モ便ナリ

シキ  
淡木

桃皮氏云是モ又淡木  
越幾斯ナルモノアリ

一 矢車

茜根 或茶  
粉

録磐

○施色

一 丹柄

丹皮  
氏云

矢車

茶汁

倍ニ晩茶ト云時々加ヘテ年  
中消渴セサルヲ用ユヘシ

○補裨色

一 施

蘇木

黃柏  
キワタ

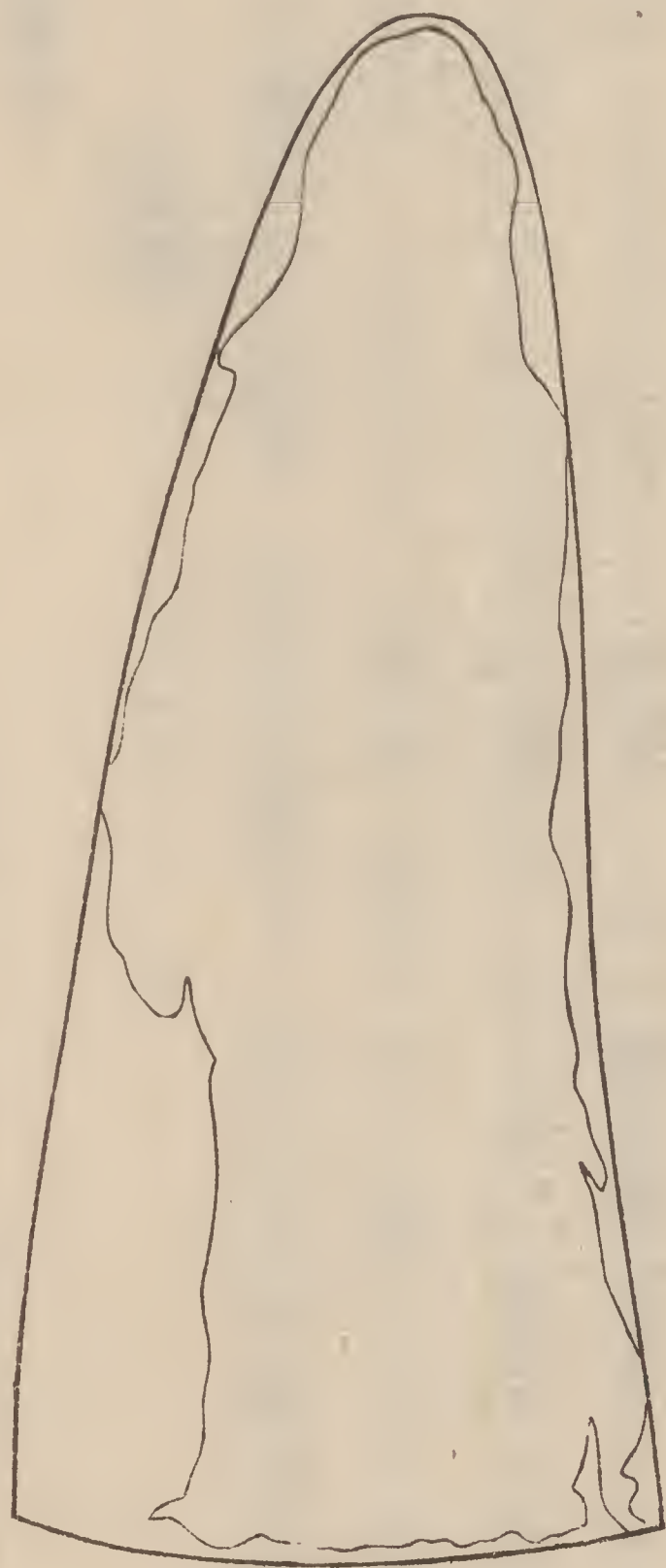
象牙彫刻品ニ用ユル漆艸漆皮類ハ、大畧如斯モノニシテ、此漆材料ヲ煮ルニハ、尤モ鉄釜ヲ忌ムヘシ、青銅又ハ銅鍋ヲ用ユルヲ好シトスレ、氏土鍋ニ過キタル者ナシ、而シテ着色以前ニ酢汁ヲ以テ先ツ象牙ヲ煮和ラクルヲアリ、諸亦着色ノ濃淡ハ時々ノ流行ニ沿テ變更スルモノナレハ、斯ニソノ法ノ一定ヲ示ス難シ、故ニ當ソノ心得ヲ記シテ參考ニ拱スルノミ、以下二十二設題迄ノ製作物ニ施色シタルハ皆之ニ倣ヘリ、



莊子曰：「履之  
人，夜半生其  
子，遽取火而  
視之，汲然然  
唯恐其似已  
註曰：惡人生  
子，恐其似已  
是，自知其惡  
也，彼且自知  
而世之惑者  
皆不自知，則  
不知其大矣  
以前面大惑  
終身不解，大  
愚終身不靈。

二 主美弃醜

丸先 高四寸底濶一寸三分  
明治十九年五月一日作



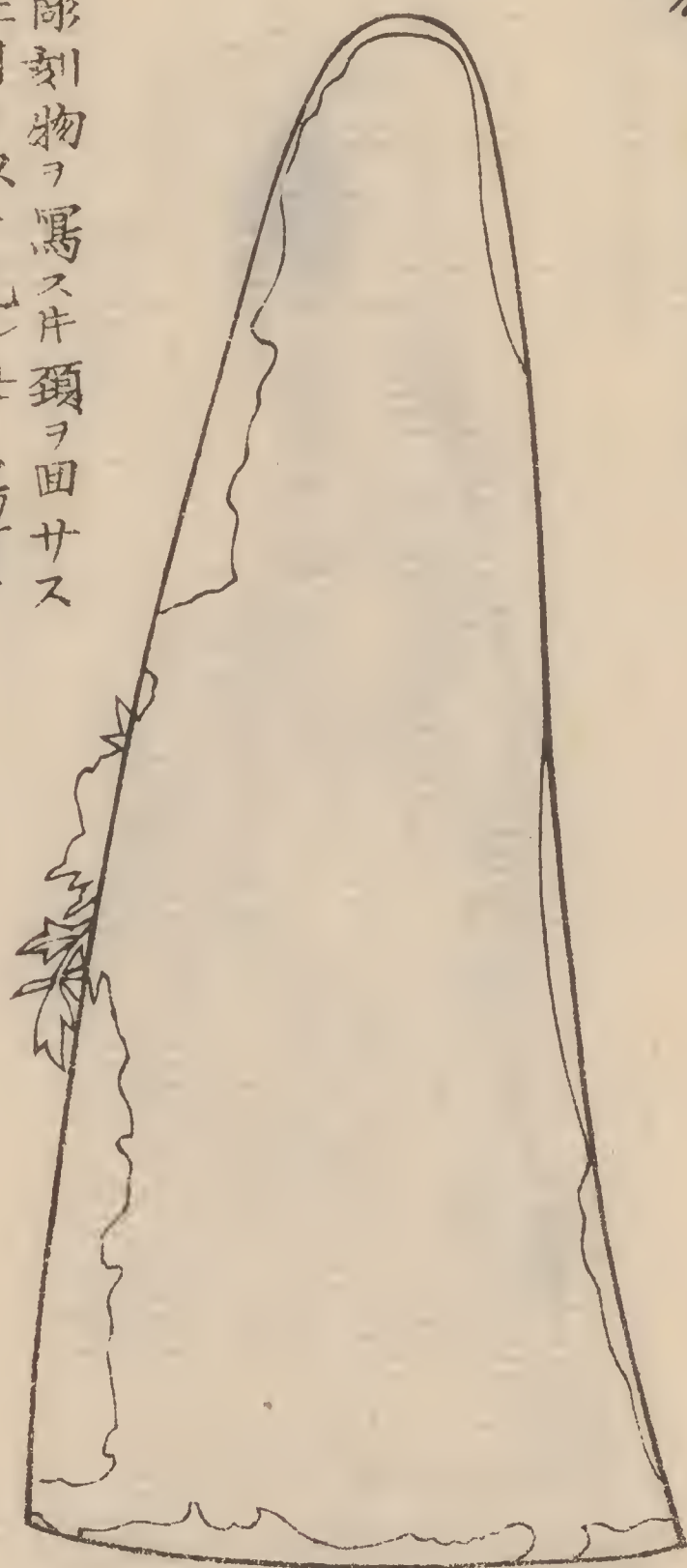
底濶一寸五分





底淵一寸七分

本地外ニ出タル輪廓ハ該彫刻物ヲ寫ス并頸ヲ回サス  
 軀ヲ振サス凡右目ヲ閉ジ左目ヲ以テ見ル處ヲ寫者ナ  
 レハ少ク裏ノ部分ヲ前面ニ浮伸シテ寫シタル者ナリ  
 凡テ本地外ニ出タル筆痕ハ如斯モノト知ルヘシ



底淵前部同





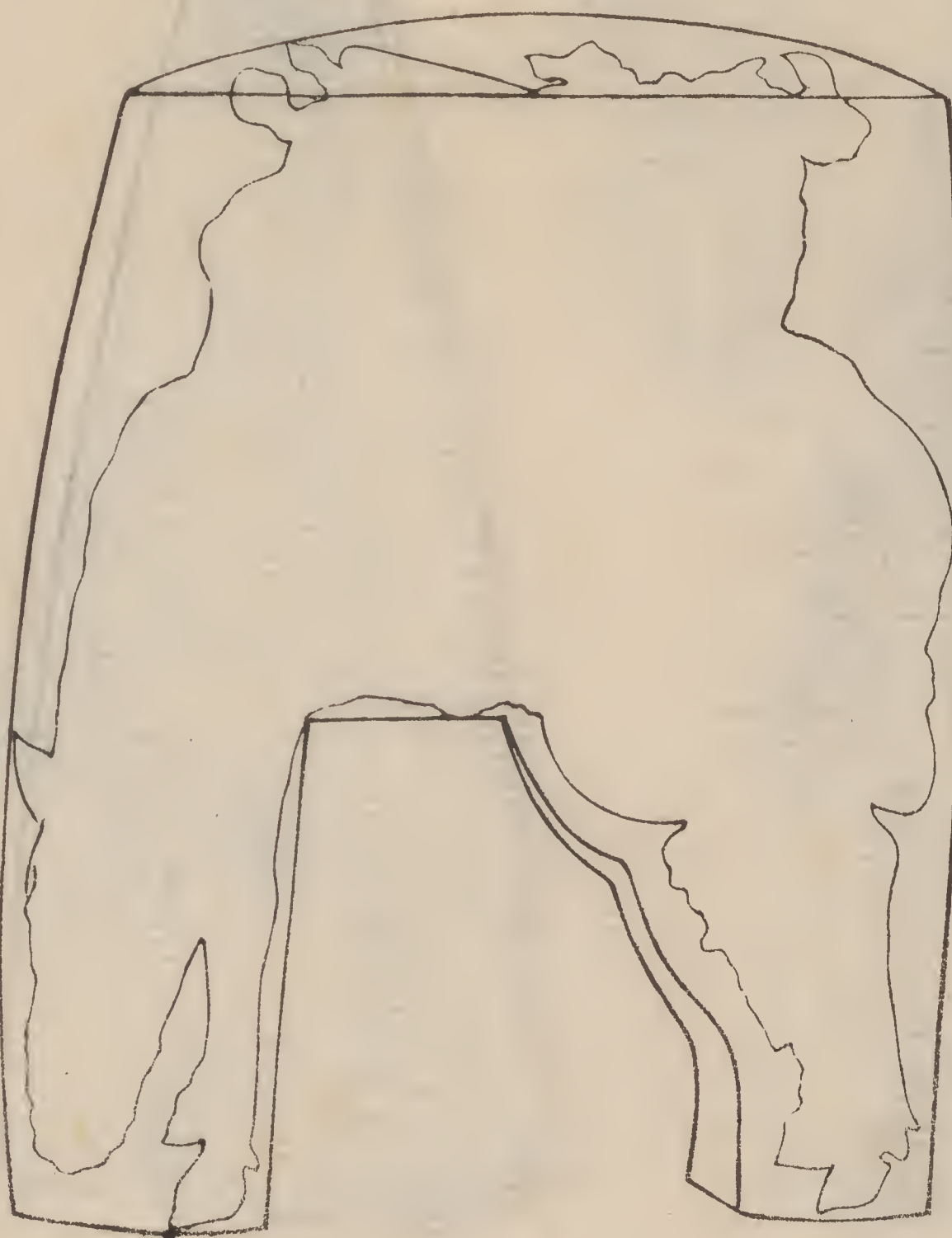
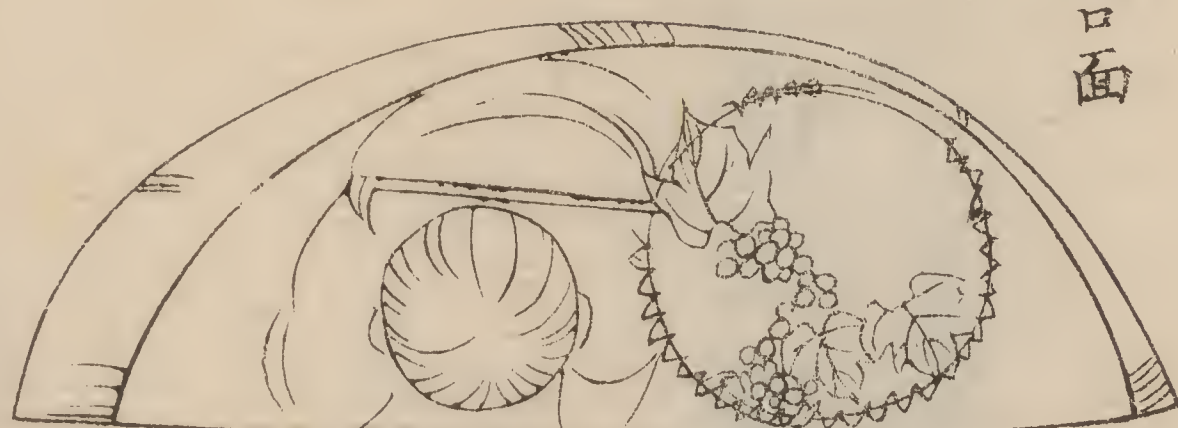
燕外山將遍  
人間日易斜  
不知綦換世  
柯爛未還家  
李俊民

三牧童思婦

割木地

高三寸五分 上巾一寸六分 中巾稍廣 下巾二寸九分  
奧巾一寸 明治十九年六月廿五日

截口面









合製全圖

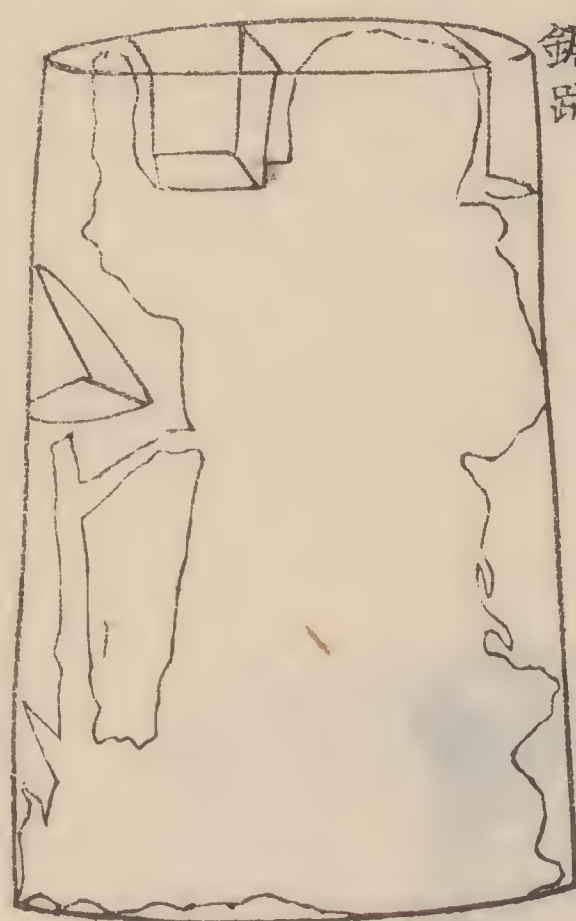


細牛房

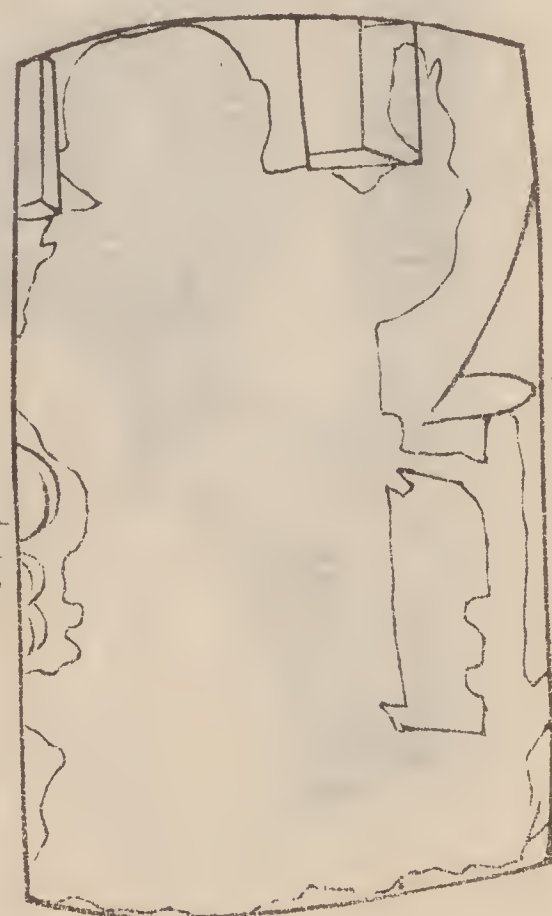
高二寸三分巾一寸四分上與一寸二分底稍濶



鋸跡



木跡

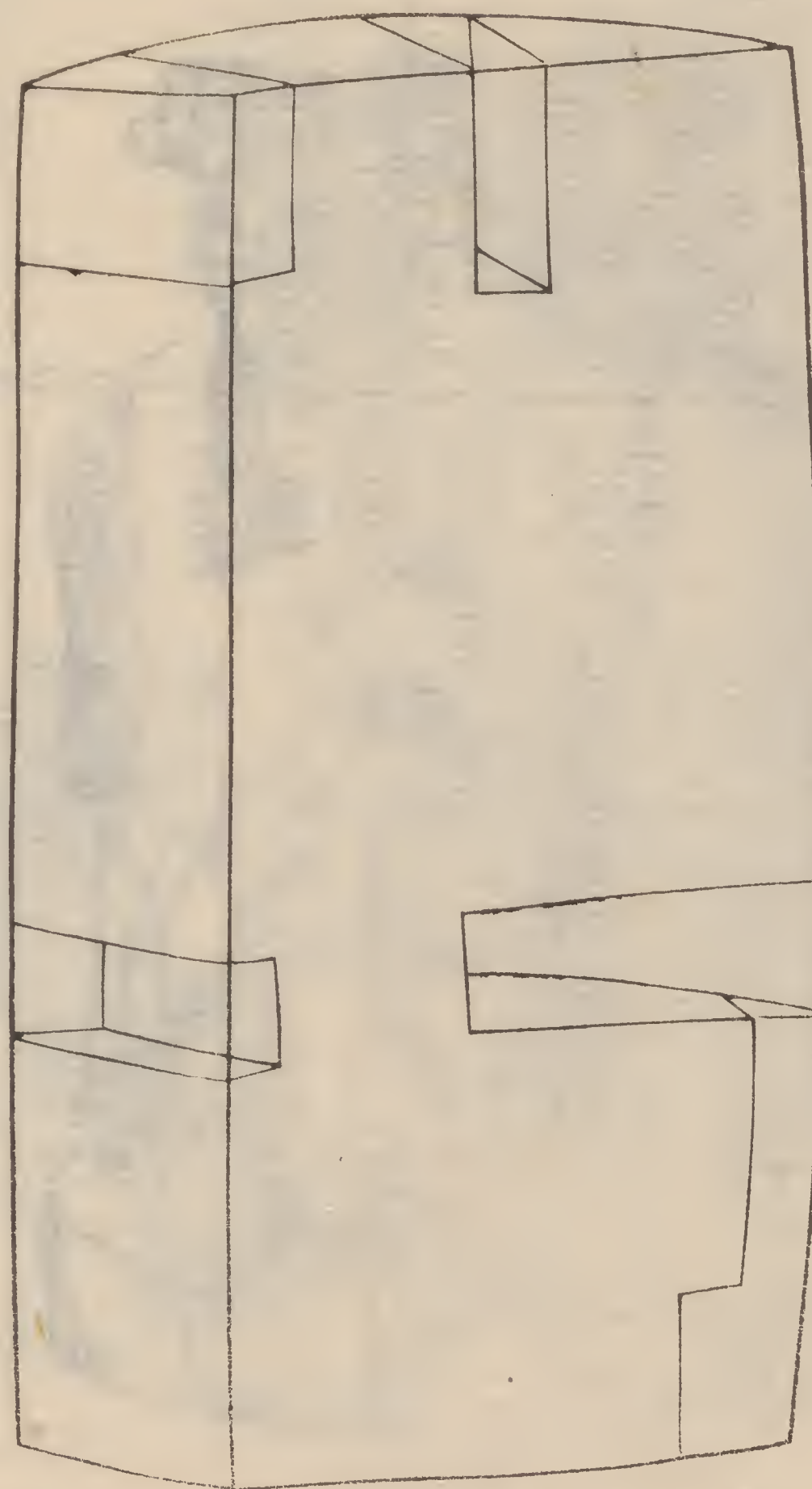
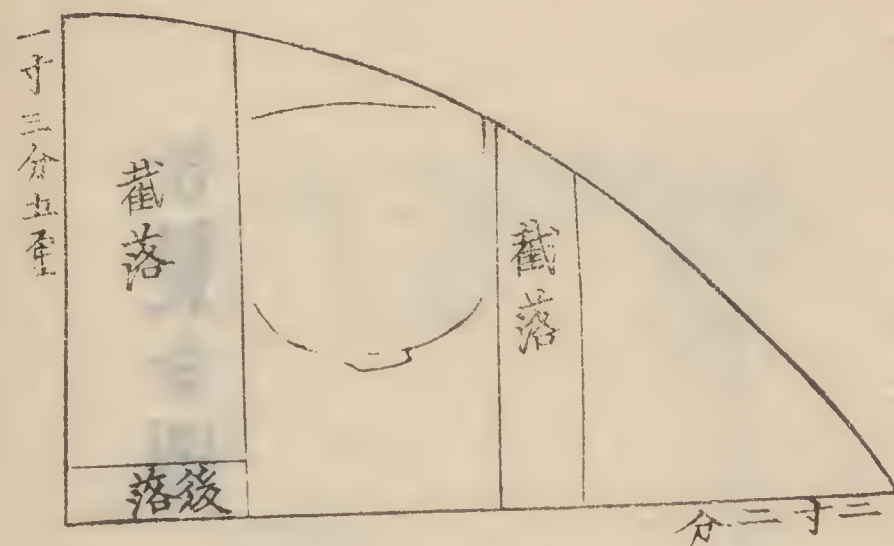




子曰、姓相近也、習相近也、淮南子曰、楊子見遠路而哭之、為其可以南、可以北、而泣之、為其可以黃、可以黑、高誘曰、憫其本同而未異、

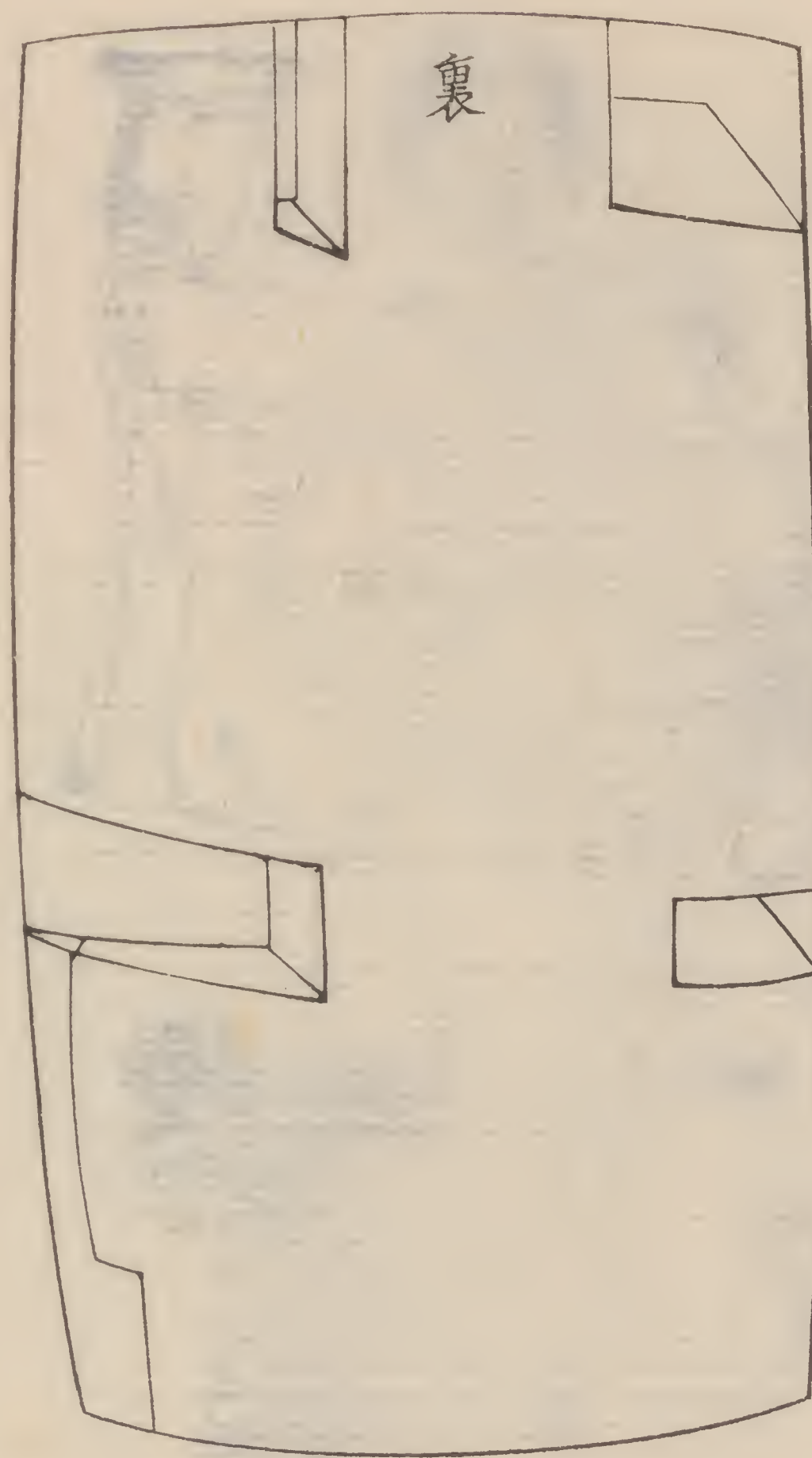
四 育兒嬉戲

撥落ノ三角木地 高四寸六分 前巾二寸二分  
與巾一寸三分五厘 明治十九年八月一日





材料ノ如何ニノ  
 三 拘泥シテ彫刻  
 セハ活潑ナル勢  
 カヲ加フル能ハ  
 スシテ活潑ナル  
 ラ妙趣ヲ失フ故  
 ニ凡本池ノ出ル  
 ヲ惜マス切斷ス  
 ヘキハ切斷シ然  
 レハ其彫刻物ノ  
 小縮セサルヲ注  
 意スヘシ



裏

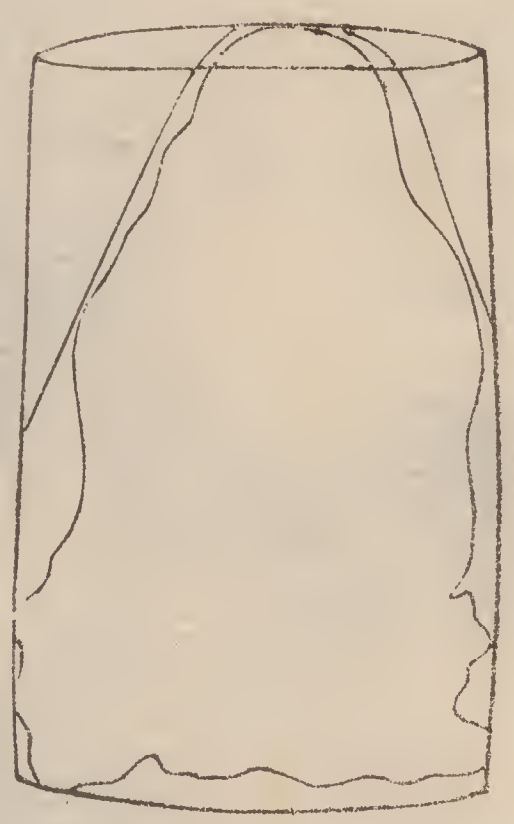




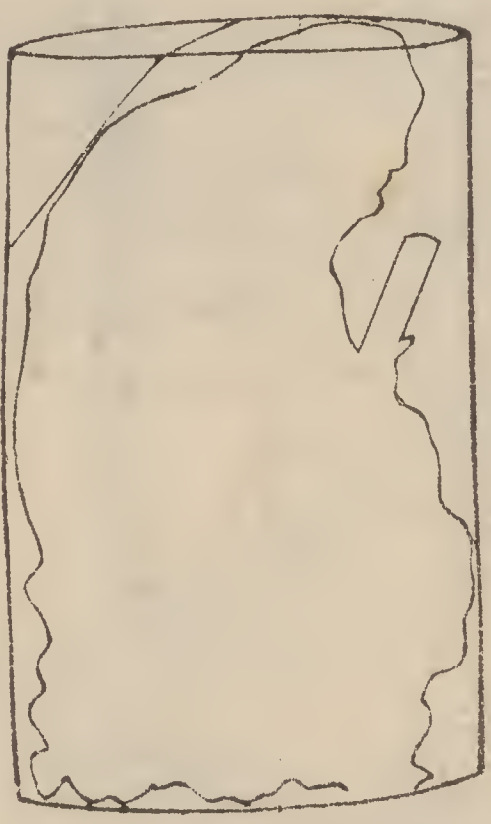
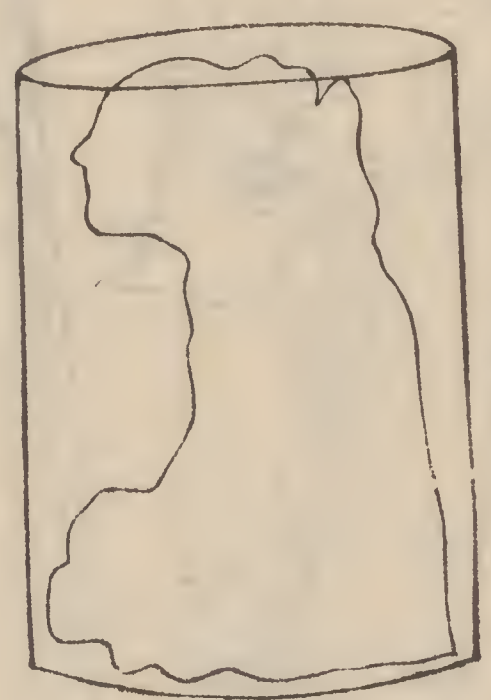
孟子曰、爲長者折枝、語人曰、我不能、是不爲也、非不能也

五 勿侮長者

樟腦木地俗人造象牙ト云、黃石公 高二寸巾一寸三分  
張良 高一寸六分巾一寸二分五厘 明治十九年八月十一日作



此ノ本地ハ水彫小刀ヲ用ユヘシ  
黃石公張良共模樣ヲ附セス





烏夜啼  
 慈鳥失其母  
 啞々吐哀音  
 晝夜不離去  
 經年守故林  
 夜々夜半啼  
 聞者為沾襟  
 聲中如告訴  
 未盡反哺心  
 百鳥豈無母  
 爾獨哀怨深  
 應是母慈重  
 使爾悲不任  
 昔有異起去  
 母致不臨  
 哀哉若以輩  
 其心不如禽  
 慈鳥復慈鳥  
 鳥中之曾參  
 白樂天

六 猫兒失母 午房本地玉截上云 高四寸六分 底巾一寸八分 上巾一寸四分  
 明治十九年八月廿九日作



初心ノ克ク用ユル材料ナリ

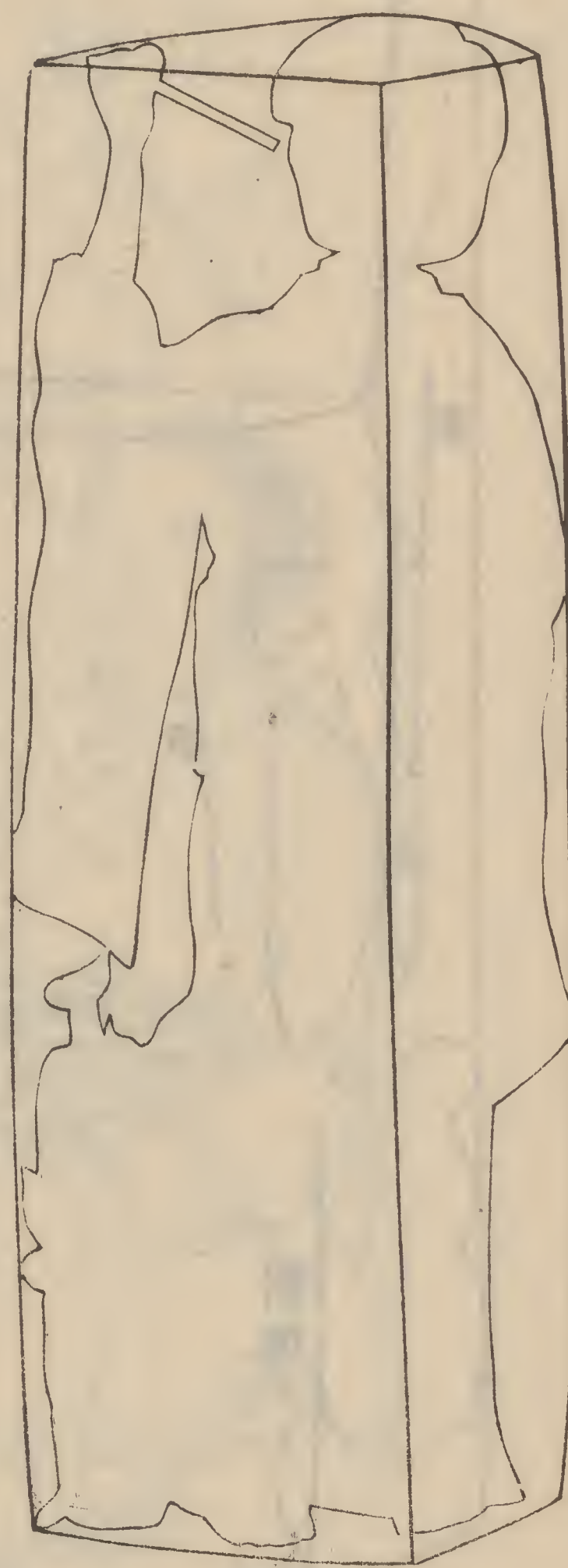
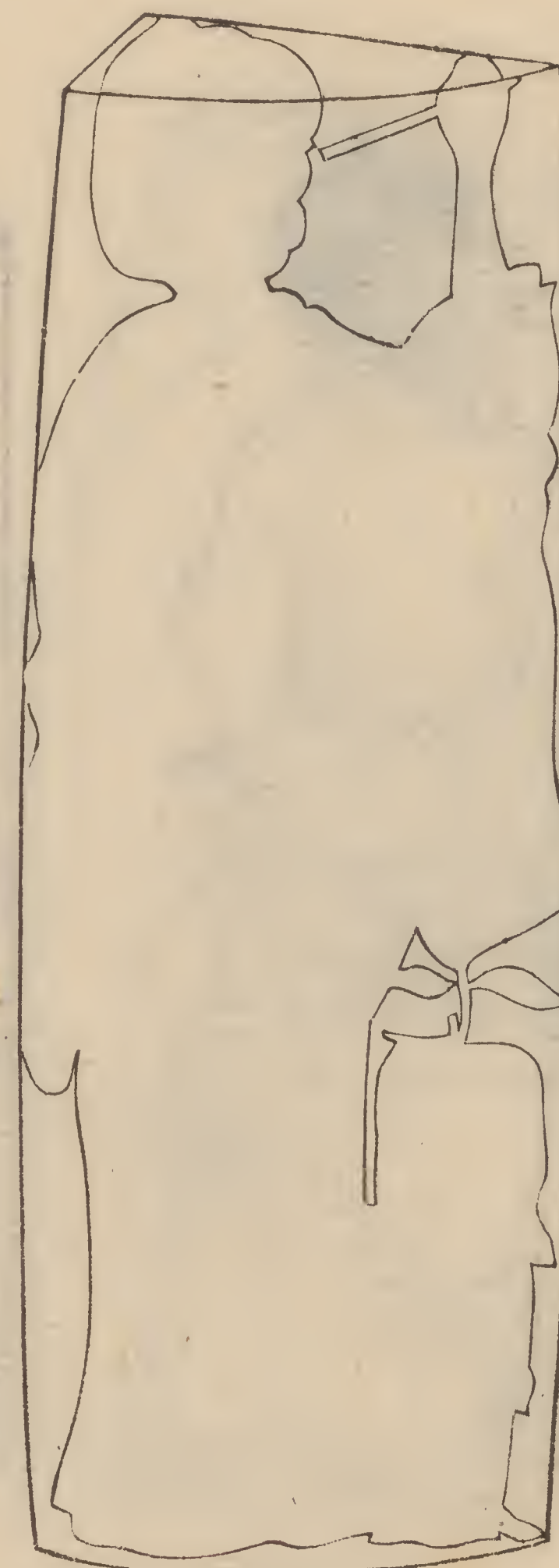




詩云鴈鴒在  
柔其子七兮  
淑人君子其  
儀一兮其儀  
兮心如結

七 婦容可愛

撥落三角木地高五寸二分巾一寸九分上下同  
明治十九年十月廿三日作



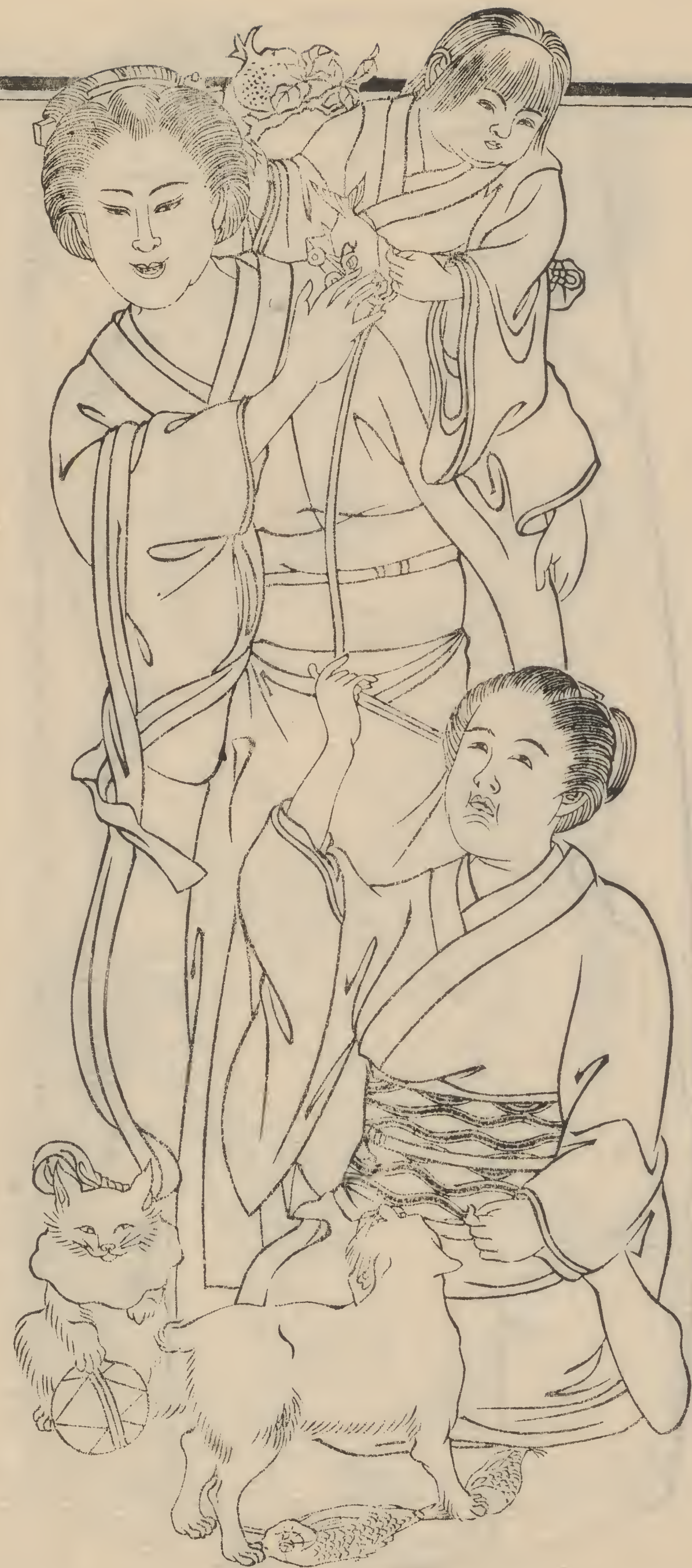
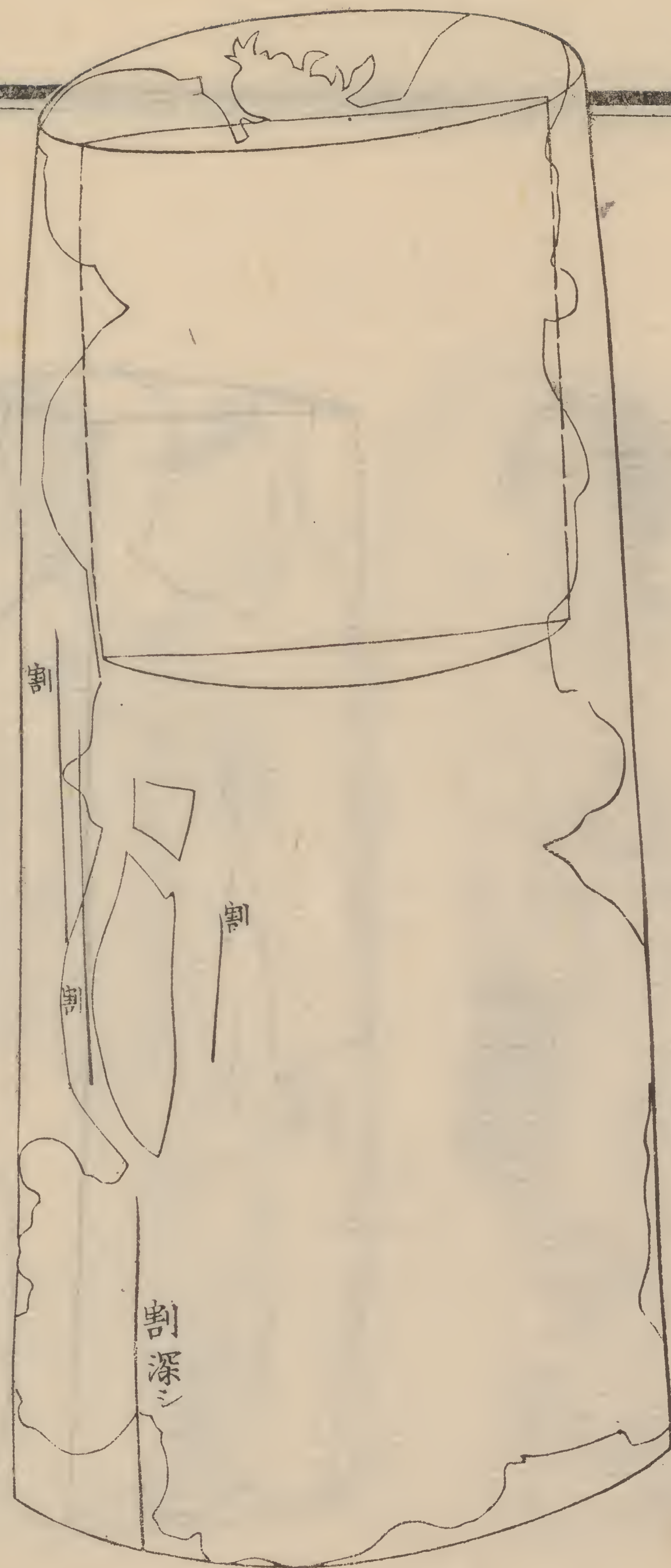


孟子曰老吾老以及人之老幼吾幼以及人之幼

八 新婦愛兒

大玉截 高六寸七分 巾三寸 奥巾凡三寸五分 割深

明治二十年二月廿六日作







材料ニ割アルキハツノ左右ニ鑿ヲ使ハス只割ニ方ヲ穿  
ツテ後図ヲ案スレハ落成シテ材料ノ小縮ヲ見サルヘシ





孫叔敖母曰  
有陰德者天  
報以福

九 蚋蜂逃生

九先 高四寸五分 底一寸四分 上市如圖  
明治二十年四月二日作

蜂



蚋

底巾一寸一分五厘





裏底巾一寸三分

端壤



田公喜  
菊

参考





公美  
飾籃

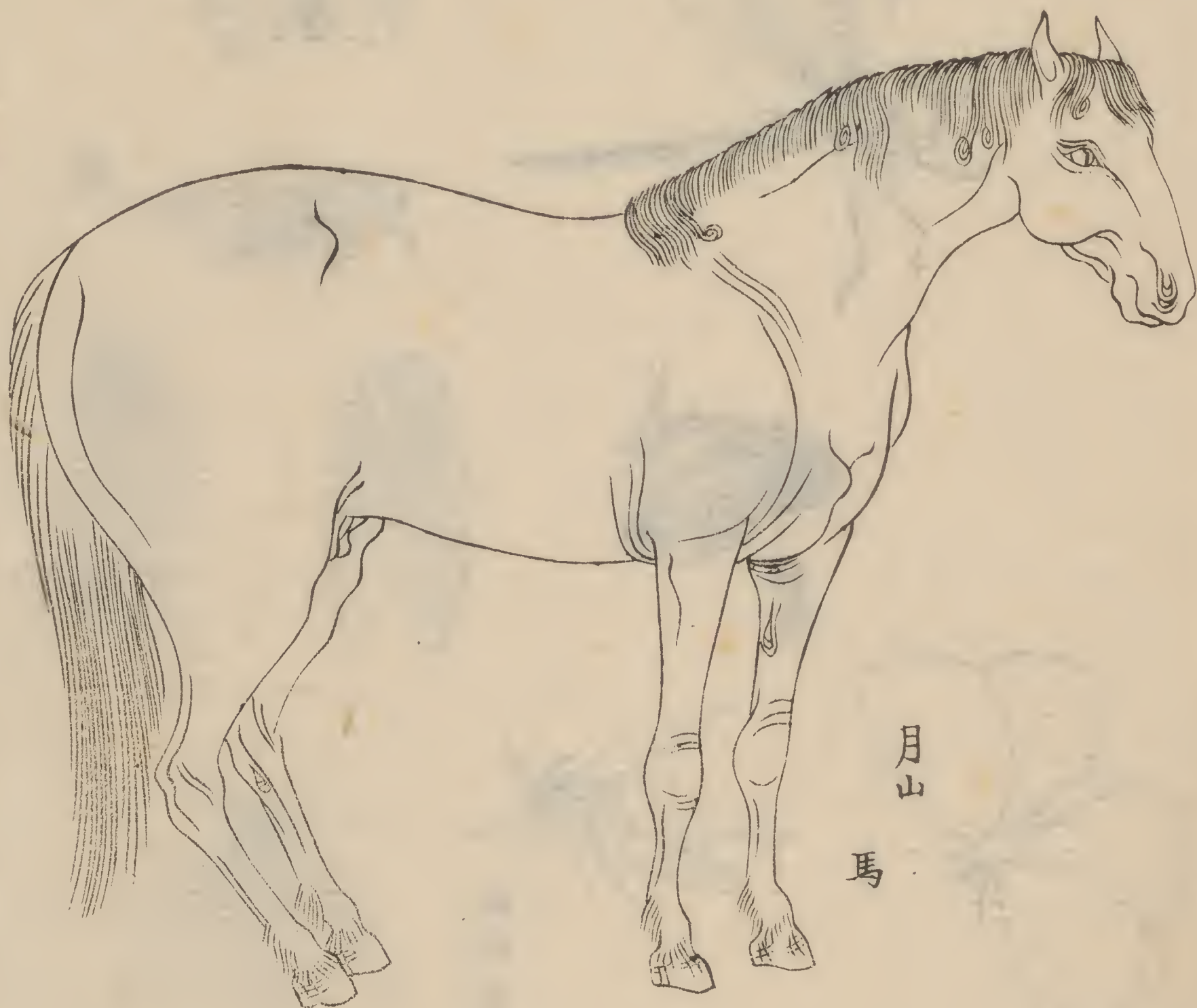


鸚鵡

猫



月山  
馬



蜂蛸ヨリ茶蠟ニ至ル迄  
ノ間ノ諸圖ハ彫刻物ニ  
アラスシテ唯名家ノ画  
又ハ寫生ノ曲ヲ示シテ  
彫刻上ノ参考ニ供セ  
シモノナリ



象牙彫刻法乾終





134  
.56  
v.1